東　京　大　学

東洋文化研究所要覧

昭　和　41　年

C3
45
4

東洋文化研究所要覧

目　次

Ⅰ　沿　　革……1
Ⅱ　目的と構成……1
Ⅲ　組織機構……2
Ⅳ　職　　員……3
Ⅴ　設　　備……18
Ⅵ　研究活動……20
　A　研究概要……20
　　1　アジア経済秩序の発展と構造……20
　　2　西アジア研究……21
　　3　新旧両大陸における文明起源の比較研究……22
　　4　古代西アジアの民族と文化……23
　　5　インドにおける支配体制と社会構造……25
　　6　デリー諸王朝時代の建造物の研究……26
　　7　東南アジア研究……26
　　8　中国における政治機構とその基礎過程……27
　　9　中国の思想と宗教……31
　　10　中国絵画の伝統と創造……34
　　11　中国の思想と文学……35
　　12　中国近現代史の研究……36

13　現代中国および朝鮮の法と経済……37
14　東アジア史における日本文化の形成……38
15　近代日本の社会と思想……39
B　研　究　業　績……42
C　東洋文化研究所紀要……65
D　研　究　会……70
Ⅶ　東洋学文献センター……85
Ⅷ　調査研究事業……86
A　イラク・イラン遺跡調査研究……86
B　中世インド＝イスラーム建造物の調査研究……89
Ⅺ　研　究　課　題……90
附1　東洋文化……113

東京大學圖書
<10>6470039915
東京大学東洋文化研究所

東洋文化研究所図書

I 沿　革

本研究所は，昭和16年11月26日，勅令第1,012号をもって，東京帝国大学に附置創設された。当初は哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の3部門で発足したが，官制公布後まもなく太平洋戦争の勃発により，拡張計画は中絶し，戦後ようやく昭和24年1月にいたって新たに3部門の増設を認められた。その結果，部門組織を細分して，哲学・宗教部門，文学・言語部門，歴史部門，美術史・考古学部門，法律・政治部門および経済・商業部門の6部門に再編成し，ついで昭和26年に文化人類学と人文地理学，さらに昭和35年には研究体制を地域区分に対応させて整備する将来計画にもとづき南アジア部門，昭和39年に東北アジア部門の増設が認められ，計10部門を擁することとなった。なお，昭和41年には東洋学文献センターが附属研究施設として設置された。

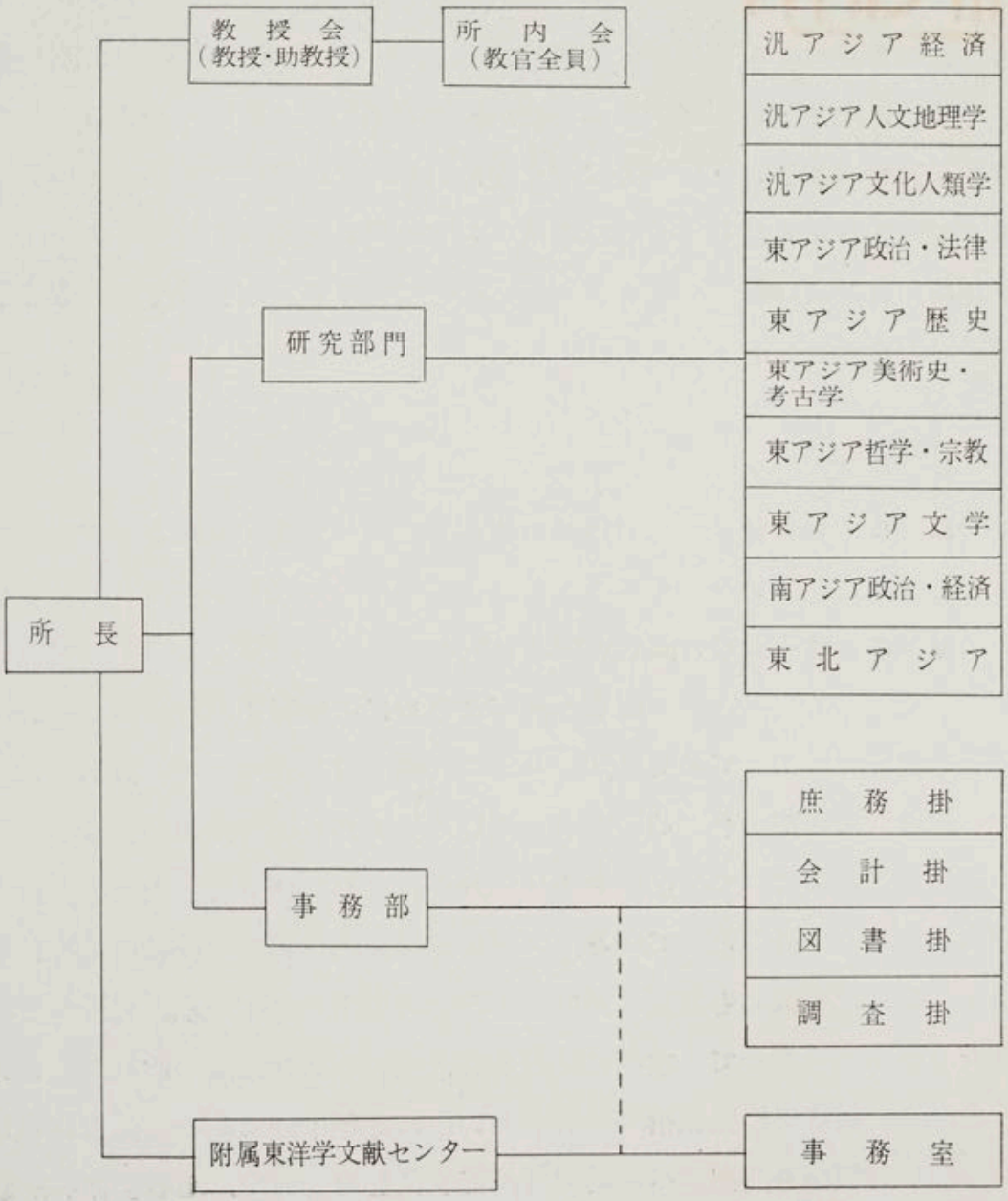
II 目的と構成

本研究所は，日本を含むアジア諸地域の政治・経済・社会・文化などの組織的，総合的研究を目的としている。もちろん，現在の程度の規模をもってしては，広汎なアジア諸地域における諸般の問題を同時に究明することは望みえないので，研究者の専門にしたがって，重点的に課題を選ぶとともに，各専門分野の孤立を避けるため，合同の研究会によって研究者間に共通の問題意識を育てつつ，個別的には達成しがたい総合研究の実を挙げるよう努めている。また，研究陣容の補強を図るため，毎年の研究計画に従って，学内および学外からも専門研究者に研究を委嘱，研究班に協力を求める方針をとっている。アジア諸地域の研究が，戦後はとくに問題山積の状況にあり，今後とも重要性が増大する一方であること，本研究所が現在，アジア研究のセンターとして，本学に特設された唯一の研究機関であることを考え合わせると，この程度の組織機構では，まだいかにも不十分である。従来日本の学界に蓄積の乏しい領域を開拓すべき研究者の養成に努力しつつ，地域全体を対象と

A33378

した初期の学科別部門編成から，さらに東アジア，東北アジア，東南アジア，南アジア，西アジアおよび内陸アジアのような地域区分にしたがって，これらの研究部門を整備し得る規模にまで陣容の拡大されることを期待している。

組　織　機　構



Ⅳ 職　　員

職　員　数（昭和41年10月1日現在）

教　　授	10名	（併）1名
助 教 授	9名	
講　　師	3名	
助　　手	14名	
研究担当（非常勤）		9名
研究委嘱（非常勤）		45名
調 査 員（非常勤）		6名
事 務 官	15名	
技　　官	3名	
事 務 員	8名	
技 能 員	1名	
用 務 員	3名	
計	66名	

職 員 氏 名（昭和41年10月1日現在）

		（本研究所就任年月日）
所　長	川 野 重 任	41. 4. 1
教　授	飯 塚 浩 二	17. 1. 16
	江 上 波 夫	22. 12. 31
	米 沢 嘉 圃	23. 4. 1
	福 島 正 夫	27. 8. 1
	川 野 重 任	17. 1. 16
	小 口 偉 一	17. 11. 30
	橋 本 秀 一	17. 1. 16

		窪　徳忠	23. 4. 1
		関野　雄	26. 11. 16
		泉　靖一	37. 4. 1
	(併)	山本達郎	17. 1. 16
助教授		松本善海	18. 7. 31
		荒　松雄	31. 6. 16
		中根千枝	27. 4. 1
		佐伯有一	38. 4. 1
		深井晋司	31. 4. 1
		山崎利男	29. 4. 1
		鈴木　敬	40. 4. 1
		大野盛雄	39. 6. 1
		尾上兼英	40. 10. 1
講　師		築島謙三	18. 12. 14
		松井　透	40. 2. 1
		鎌田茂雄	33. 4. 1
助　手		板垣雄三	35. 4. 1
		甘粕　健	36. 4. 1
		石田米子	37. 4. 1
		月輪時房	38. 4. 1
		梶村秀樹	38. 4. 1
		黒田和彦	39. 5. 20
		山之内正彦	39. 12. 10
		榎本暢子	39. 12. 10
		松谷敏雄	40. 4. 1
		浜島敦俊	40. 4. 1

加藤祐三	41. 4. 1	
江島恵教	41. 4. 1	
池端雪浦	41. 4. 1	
伊藤知恵子	41. 4. 1	

研究担当（非常勤）

古島和雄	28. 4. 1
小野　忍	40. 4. 1
周藤吉之	32. 12. 1
大林太良	34. 4. 1
井上光貞	38. 4. 1
丸山真男	40. 4. 1
西嶋定生	40. 4. 1
曽野寿彦	40. 4. 1
柳川啓一	40. 4. 1

研究委嘱（非常勤）

坂野正高	30. 4. 1
花村芳樹	31. 4. 1
新　規矩男	31. 6. 1
増田精一	31. 6. 1
宮川　透	32. 4. 1
竹内　実	33. 4. 1
野村浩一	33. 4. 1
原　覚天	33. 4. 1
堀　敏一	33. 4. 1
本橋　渥	33. 4. 1
野田幸三郎	35. 4. 1

柳田節子	35. 4. 1
加賀谷　寛	36. 4. 1
塩入良道	36. 4. 1
新島淳良	36. 4. 1
堀内清治	37. 4. 1
丸山　昇	37. 4. 1
泰本　融	37. 4. 1
井門冨二夫	38. 4. 1
川上　涇	38. 4. 1
戸田禎佑	38. 4. 1
中村平次	38. 4. 1
三宅俊成	38. 4. 1
古賀正則	38. 7. 1
小倉芳彦	39. 4. 1
小山正明	39. 4. 1
関　寛治	39. 4. 1
田中正俊	39. 4. 1
常盤絢子	39. 4. 1
野沢　豊	39. 4. 1
針生誠吉	39. 4. 1
福島　裕	39. 4. 1
森岡清美	39. 4. 1
生松敬三	39. 4. 1
和田久徳	39. 4. 1
池田次郎	39. 10. 1
近藤邦康	40. 4. 1

	杉山二郎	41. 4. 1
	西川正二	41. 4. 1
	木山英雄	41. 4. 1
	白鳥芳郎	41. 4. 1
	菅沼正久	41. 4. 1
	滝川　勉	41. 4. 1
	松丸道雄	41. 4. 1
	村上正二	41. 4. 1
調査員（非常勤）		
	大貫良夫	41. 3. 10
	狩野千秋	41. 3. 10
	藤井竜彦	41. 3. 10
	上野　猛	41. 3. 10
	山本宏義	41. 3. 10
	小林和正	41. 5. 1
事務長	宮本　健	38. 11. 1
総務主任	大嶋真治	39. 2. 1
庶務掛長	千代延哲男	40. 2. 1
事務官	五木田　浩	28. 4. 20
事務員	館野照政	38. 3. 25
用務員	溝呂木静雄	22. 6. 26
	橋本公治	30. 4. 16
	竹内竹司	33. 2. 1
会計掛長（併）	大嶋真治	39. 2. 1
事務官	加藤静子	27. 4. 1

	花島　栄	34. 4. 1
事務員	吉沢国太郎	39. 1. 16
	赤沢トキ子	39. 1. 24
技　官	和田秀雄	28. 7. 1
図書掛長	植谷忠雄	29. 10. 1
事務官	江原千代子	23. 6. 6
	中村隆治	26. 3. 16
	中村摩利子	28. 5. 1
	中田　実	36. 12. 1
	中村敬子	34. 8. 1
	半沢哲郎	37. 10. 1
事務員	萩庭　勇	39. 7. 1
	風間　勉	39. 9. 3
	長野　真	39. 3. 17
調査掛主任	今城治子	20. 4. 1
事務官	羽石咸子	39. 2. 1
事務員	佐多正子	39. 4. 17
	森　ミドリ	41. 4. 1
イラク・イラン調査室技官		
	古山　学	37. 4. 1
	千代延恵正	38. 12. 1
インド調査室技能員		
	木村源蔵	37. 3. 3

旧職員氏名

所　長	桑田芳蔵	16. 11. 27～18. 3. 31
	宇野円空	18. 3. 31～21. 10. 5

		戸田貞三	21. 10. 5～22. 9. 30
		辻　直四郎	22. 9. 30～29. 3. 21
		仁井田　陞	29. 3. 31～33. 7. 10
		飯塚浩二	33. 7. 10～35～ 7. 9 39. 7. 10～40. 3. 1
		結城令聞	35. 7. 10～37. 7. 9
		江上波夫	37. 7. 10～39. 7. 9
		小口偉一	40. 3. 1～41. 3. 31
教　授	(兼)	北山　富久二郎	17. 6. 26～19. 7. 31
	(兼)	荒木光太郎	19. 7. 31～20. 11. 17
		宇野円空	17. 1. 16～21. 10. 5
	(兼)	宮沢俊義	19. 9. 27～28. 3. 31
	(兼)	山田盛太郎	22. 8. 20～32. 3. 31
	(兼)	辻　直四郎	22. 9. 30～29. 3. 31 22. 7. 1～33. 6. 30 33. 11. 1～35. 3. 31
		石田英一郎	26. 5. 20～37. 3. 31
		結城令聞	17. 11. 30～38. 3. 31
		仁井田　陞	17. 1. 16～39. 3. 31
		植田捷雄	17. 1. 16～40. 3. 31
	(兼)	丸山真男	17. 1. 16～40. 3. 31
	(兼)	小野　忍	34. 5. 1～40. 3. 31
助教授		泉　靖一	26. 11. 21～30. 3. 31
		周藤吉之	23. 4. 1～30. 8. 15
	(兼)	西嶋定生	23. 4. 1～40. 3. 31
講　師		小野　忍	27. 12. 1～30. 11. 30
助　手		萩野秀一	18. 3. 31～21. 3. 31
		鈴木忠和	17. 5. 25～22. 9. 10

鈴木中正	17. 3. 9～23. 8. 31	
坂野正高	17. 9. 30～23. 9. 23	
後藤基巳	24. 6. 1～25. 12. 31	
飯田須賀斯	23. 4. 1～26. 3. 31	
山口　修	22. 9. 30～26. 10. 15	
小倉芳彦	24. 3. 31～28. 3. 31	
古島和雄	24. 3. 31～28. 3. 31	
衛藤瀋吉	24. 1. 10～28. 11. 15	
小堀　巌	24. 1. 10～29. 3. 31	
大木幹一	23. 4. 1～29. 6. 30	
稲葉誠一	23. 4. 1～30. 4. 30	
花村芳樹	22. 10. 1～31. 3. 31	
荒　松雄	22. 10. 21～31. 3. 31	
高橋庸三	29. 7. 1～31. 3. 31	
宮川　透	26. 4. 1～32. 3. 31	
生松敬三	28. 4. 1～32. 3. 31	
佐伯有一	26. 4. 1～32. 6. 30	
堀　敏一	24. 3. 31～33. 3. 31	
高木宏夫	24. 8. 1～32. 3. 31 32. 7. 1～33. 3. 31	
大林太良	27. 4. 1～34. 3. 31	
大野盛雄	28. 4. 1～35. 2. 8	
佐藤達夫	29. 4. 1～35. 3. 31	
柳田節子	33. 4. 1～35. 3. 31	
重田　徳	28. 4. 1～36. 3. 31	
大島美津子	30. 4. 1～36. 3. 31	
加賀谷　寛	31. 4. 1～36. 3. 31	

	中村平次	32. 4. 1～38. 3. 31
	古賀正則	33. 4. 1～38. 6. 30
	関　寛治	33. 4. 16～39. 3. 31
	西川正二	33. 4. 1～39. 3. 31
	近藤邦康	34. 4. 1～40. 3. 31
	木山英雄	35. 4. 1～41. 3. 31
	松丸道雄	35. 4. 1～41. 3. 31
嘱　託	磯田　進	17. 10. 31～18. 4. 30 21. 12. 28～23. 3. 31
	須田昭義	17. 6. 30～19. 6. 30
	大桃要三郎	19. 4. 30～19. 8. 31
	土屋喬雄	17. 11. 13～19. 12. 25
	張　漢裕	19. 3. 31～21. 3. 31
	大場千秋	17. 11. 30～22. 9. 30
	村上正二	20. 4. 1～22. 9. 30
	矢崎源九郎	19. 2. 29～22. 10. 31
	日下部文夫	19. 4. 30～22. 10. 31
	松山　納	19. 9. 30～22. 10. 31
	岩本　裕	20. 6. 1～22. 10. 31
	山本快竜	20. 6. 1～22. 10. 31
	三根谷　徹	21. 1. 4～22. 10. 31
	吉川逸治	17. 11. 30～23. 3. 31
	藤井　宏	17. 11. 30～23. 3. 31
	梶井光運	18. 9. 30～23. 3. 31
	四宮和夫	19. 8. 31～23. 3. 31
	後藤基巳	17. 10. 30～23. 3. 31
研究員	青山定雄	23. 4. 1～24. 5. 31

	後藤基巳	23. 4. 1～24. 5. 31
	三上次男	23. 4. 1～24. 5. 31
	滝　遼一	23. 4. 1～24. 5. 31
	横超慧日	23. 4. 1～24. 5. 31
	永島栄一郎	23. 4. 1～24. 5. 31
	島田正郎	23. 4. 1～24. 5. 31
(非常勤)	磯田　進	23. 4. 1～24. 3. 31
	江　実	26. 4. 1～27. 3. 31
	祖父江孝男	29. 7. 1～30. 3. 31
	半田市太郎	30. 4. 1～31. 3. 31
	高木宏夫	32. 4. 1～32. 6. 30 33. 4. 1～38. 3. 31
	小堀　厳	29. 4. 1～33. 3. 31
	小野　忍	31. 4. 1～34. 3. 31
	阪口　豊	31. 6. 1～34. 3. 31
	桜井清房	33. 9. 1～34. 3. 31
	石井　昭	33. 11. 1～34. 9. 30 36. 7. 1～41. 3. 31
	甘粕　健	33. 11. 1～34. 9. 30 35. 4. 1～36. 3. 31
	曽村保信	33. 4. 1～36. 3. 31
	香山陽平	35. 4. 1～36. 3. 31
	大貫良夫	35. 4. 1～36. 5. 15
	月輪時彦	34. 6. 1～36. 10. 31 37. 5. 30～38. 3. 31
	斎藤菊太郎	36. 4. 1～36. 10. 31 37. 3. 11～38. 3. 31
	吉岡義豊	33. 4. 1～37. 3. 31
	佐藤達夫	35. 4. 1～37. 3. 31
	尾上兼英	36. 4. 1～37. 3. 31
	重田　徳	36. 4. 1～37. 3. 31

三枝朝四郎	31.	6.	1～37	10	31
	37.	4.	1～41.	3.	31
佐伯有一	32.	12.	1～38.	3.	31
生松敬三	32.	4.	1～38.	3.	31
石田英一郎	37.	4.	1～38.	3.	31
西野照太郎	36.	3.	1～39.	3.	31
石母田正	38.	4.	1～39.	3.	31
糸賀昌昭	38.	4.	1～39.	3.	31
寺田和夫	38.	4.	1～39.	3.	31
	40.	4.	1～41.	3.	31
池田次郎	31.	6.	1～39.	3.	31
松谷敏雄	38.	4.	1～39.	3.	31
大野盛雄	35.	4.	1～39.	5.	31
松井透	38.	4.	1～40.	1.	31
村上重良	35.	4.	1～40.	3.	31
嶋田襄平	36.	4.	1～40.	3.	31
鈴木敬	38.	4.	1～40.	3.	31
三木亘	39.	4.	1～40.	3.	31
林武	39.	4.	1～40.	3.	31
杉山二郎	40.	4.	1～40.	6.	24
衛藤潘吉	28.	11.	16～41.	3.	31
大島太市	34.	7.	1～41.	3.	31
黒柳恒男	36.	4.	1～41.	3.	31
増田昭三	40.	4.	1～41.	3.	31

調査員（非常勤）

斎藤菊太郎	36.	11.	1～37.	3.	10
三枝朝四郎	36.	11.	1～37.	3.	31

月輪時房	36. 11. 1～37. 5. 29	
宮崎　泰	38. 2. 1～39. 3. 31	
友枝啓泰	38. 2. 1～39. 3. 31	
池田次郎	39. 1. 1～39. 8. 31	
堀内清治	39. 1. 1～39. 8. 31 40. 6. 1～41. 3. 31	
大貫良夫	38. 2. 1～39. 3. 31	
狩野千秋	38. 2. 1～39. 3. 31	
松谷敏雄	38. 12. 1～39. 9. 30	
三宅俊成	38. 12. 1～39. 10. 31	
杉山二郎	40. 6. 25～41. 4. 23	

なお，制度上，研究員の名称は昭和23年4月から昭和37年3月まで使用されたが，昭和37年4月以降，本学内の教官には研究担当，それ以外の者には研究委嘱と呼称されることになった。

事務官	山高力三	16. 11. 27～17. 10. 1
	根本喜蔵	16. 12. 8～19. 7. 8
	高木武雄	18. 5. 18～20. 5. 25
	(兼) 萩野秀一	19. 7. 10～21. 3. 31
	長内太郎吉	19. 7. 10～29. 7. 15
	野依菊之助	21. 8. 20～30. 3. 31
	横山　勉	30. 4. 1～30. 11. 16
	田頭　敏	23. 1. 5～32. 7. 15
	岡庭文雄	23. 4. 1～33. 10. 8
	根田信一	28. 1. 1～35. 6. 30
	塚本章寿	23. 4. 1～36. 4. 30
	永田千枝子	30. 10. 1～36. 7. 31
	駒見直行	25. 6. 5～37. 6. 30

小林　　眸	32. 8. 16～38. 2. 28
中元　　昇	30. 12. 16～38. 12. 1
工藤　松之助	29. 7. 16～38. 10. 31
遠藤　　譲	22. 4. 7～39. 4. 1
苅部　良吉	32. 4. 2～39. 5. 1
友坂　恵美	35. 4. 1～39. 5. 31
丸山　　巍	38. 3. 1～39. 7. 31
上代　　清	36. 6. 1～40. 2. 1

外国出張

	出張先国	出張期間
第2次インド史蹟調査団（山本達郎他5名）	インド，パキスタン	36. 11～37. 3
川野重任	アメリカ，イギリス	37. 3～37. 6
植田捷雄	アメリカ，イギリス	37. 9～38. 1
築島謙三	インド	37. 11～37. 11
江上波夫	イラク，イラン，パキスタン，インド，タイ，カンボジア，南ベトナム，香港	37. 11～38. 1
中根千秋	インド，タイ，ラオス，南ベトナム，フィリッピン，ビルマ，インドネシア，カンボジア，マラヤ連邦，シンガポール	37. 12～38. 3
米沢嘉圃	中国	33. 12～38. 1
板垣雄三	アラブ連合，レバノン，シリア，イラク	38. 2～38. 3
第3次アンデス調査団（泉靖一他4名）	アメリカ，メキシコ，コロンビア，エクアドル，ペルー，ボリビア，チリー，アルゼンチン，パラグワイ，ブラジル，ポルトガル，スペイン，イラク，イラン	38. 5～38. 10

中根千枝	マレーシア	38. 12～38. 12
植田捷雄	イギリス，西ドイツ，オランダ，フランス，イタリア	38. 11～38. 12
第4四次イラク・イラン遺跡査団（江上波夫他6名）	イラク，イラン	39. 3～39. 8
小口偉一	中国	39. 8～39. 8
川野重任	フランス，西ドイツ，オランダ，ベルギー	39. 8～39. 9
大野盛雄	イラン	39. 6～40. 2
泉靖一	ソ連，オーストリア，西ドイツ，スペイン	39. 7～39. 9
築島謙三	マレーシア	39. 10～40. 3
中根千枝	アメリカ，イタリア，インド	39. 9～40. 9
板垣雄三	アラブ連合	40. 5～
第5次イラク・イラン遺跡調査団（江上波夫他4名）	イラン，イラク，ヨルダン，アラブ連合，他	40. 6～41. 3
榎本暢子	南ベトナム，インド，パキスタン，セイロン，カンボジア	40. 7～
川野重任	アメリカ	40. 9～40. 9
泉靖一	アメリカ	40. 9～40. 9
大野盛雄	イラン	41. 3～
中根千枝	アメリカ，イギリス，フランス，イタリア，インド	41. 4～41. 5
泉靖一	アメリカ，イギリス，インド	41. 4～41. 4
松井透	マレーシア，インド	41. 4～41. 5
米沢嘉圃	中国	41. 5～41. 5
鈴木敬	中国	41. 5～41. 5
関野雄	中国	41. 5～41. 5

第4次アンデス調査団（泉靖一他4名）	ペルー，ボリビア，チリー，アルゼンチン	41. 4～
小口偉一	南西諸島（沖縄）	41. 7～41. 8
窪徳忠	〃	〃
中根千枝	〃	〃
江上波夫	チェコスロバキア，ソ連，イタリア，西ドイツ，イラク，イラン，レバノン，ヨルダン，スイス，他	41. 8～
中根千枝	インド，フランス	41. 9～41. 9
米沢嘉圃	ソ連	41. 9～

外国人研究員

氏名	国籍	指導教官	研究課題	期間
Morton, William, F.	米	植田教授	日中関係史	昭36～37
Mallappa, B.	印	植田教授	終戦直後における日米関係	36～37
Seshaiah, S.	印	植田教授	日本の経済外交	36～37
Kreiner, Josef	濠	石田教授	沖縄の民俗と信仰	36～38
Flood, Edward	米	植田教授	日本の歴史	38～40
Helmy, Zeinab	ア連合	築島講師	日本人の性格	39～40
Jettmar, Dieter	濠	泉教授	日本文化の研究	39～41
White, Nathan	米	植田教授 橋本教授	日本の政治における決定作成	39～43
Glarn, Elza	澳	関野教授	中国建築史	40～41

V 設　　備

1. 建　　物

本研究所は，当初，本学構内に建物をもつことが予定されていたが，戦争の拡大により計画の実現が不可能となったので，暫時，本学附属図書館内に研究室，書庫，事務室を置いた。昭和23年4月1日，外務省所管の東方文化学院の解消をみるに及んで，同年7月に同学院東京研究所の所在地であった大塚に本拠を移すこととなり，外務省研修所と同居という暫定的な形で，旧学院の建物の一半を使用し，従来利用していた附属図書館研究室の一部を分室とした。このように，研究施設としてまことに遺憾の多い状況のまま20余年を数えるにいたったが，さいわい本学構内に建物を新築する計画が具体化し，その第1期工事の完成にともない，昭和40年10月に研究室の一部と事務室が移転した。さらに，第2期工事が目下進められている。

2. 図　　書

昭和41年9月末現在の蔵書数は，

和漢書	212,367冊
洋　書	16,749冊
雑　誌	1,588種
未整理	16,000冊

で，最近では年間平均5,000冊以上増加している。

収蔵した主要なものをあげると，次のとおりである。

〔**大木文庫の受贈**〕 本研究所創設の当初，大木幹一氏より中国法制関係書総数3,168部，45,452冊の寄贈を受けた。法律のみならず，政治，外交，経済，産業などの研究上，実用に供し得る意味での貴重書が多く，清代以後の時期の研究にはとくに欠くことのできない蒐集資料である。いわゆる官箴や公牘の類の数百部は，本文庫のひとつの柱梁をなしている。その目録は昭和34年旧蔵者の編纂により刊行された。

〔帝国学士院東亜諸民族調査室蔵書の移管〕 昭和19年帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない，その蔵書和漢洋・雑誌・資料等 2,000 冊が移管された。それらのうちには西欧における東亜諸民族研究の主要なものが集められている。

〔旧東方文化学院の図書の利用〕 東方文化学院東京研究所は，昭和 4 年に東洋文化の総合研究の機関として創設され，外務省の所管に属したが，昭和23年度から文部省に移轄され，本研究所に吸収された。その旧蔵書の和漢洋あわせて 103,587 冊はそのまま本研究所の使用に供されることとなった。

〔松本忠雄氏旧蔵書の購入〕 昭和25年度科学研究費交付金により，松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書，雑誌など 3,000 冊を購入した。これはとくに近代中国研究資料として重要なものを多く含んでいる。

〔長沢規矩也氏蔵書の購入〕 昭和26・28両年度科学研究交付金により，長沢規矩也氏の蔵書約 3,000 冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類で，稀覯書も少なくなく，中国文学研究上重要な資料である。昭和36年11月本研究所創立20年に当り，同氏から約 150 冊の補充を得るとともに，双紅堂文庫分類目録を刊行した。

〔清野謙次氏旧蔵書の購入〕 昭和27・28両年度科学研究費交付金により，清野謙次氏旧蔵洋書 570 冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする貴重なコレクションである。

〔矢吹慶輝氏旧蔵書の購入〕 昭和27年度科学研究費交付金により，矢吹慶輝氏旧蔵洋書約 360 冊を購入した。英・仏・独のマニ教関係の文献がその中心をなし，他に仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

〔下中文庫の受贈〕 本文庫は下中弥三郎氏の寄贈にかかる。昭和28年 1 月より32年 6 月に至るまで，戦後出版の中国書 4,500 冊，中国雑誌10種及び戦後出版の東洋関係洋書 130 冊を受贈した。特に中国書はその主要なものをほとんど網羅し，戦後の中国研究に対し重要な資料となるものである。

〔東京銀行調査部所蔵資料の受贈〕 34・35昭和両年度にわたり東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和洋書・資料類約18,000冊の寄贈を受けた。

そのほか，昭和33年度から3ヶ年にわたって，文部省「アジア地域の社会・経済構造」総合研究の一環として，その資料（主として洋書）1,800冊を購入し，さらに昭和36年度から40年度まで文部省機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」により継続して蒐書に努めて，総数4,771冊に達した。

VI 研 究 活 動

A 研 究 概 要

1 アジア経済秩序の発展と構造

教授　川野重任，研究委嘱　原　覚天，滝川　勉

本研究班は39年度までは橋本が加わり，標題のもとに研究を進めた。41年度からは新たに滝川の参加を得て，班としての研究課題を「アジア地域経済発展の比較研究」とした。橋本の研究業績は同教授参加の「東南アジア研究」のそれに譲る。

川野は日本との比較における東南アジア諸国——とくに台湾，ヴェトナム，インド——の土地改革の問題をその社会的基礎，経済的効果について研究するとともに，台湾を対象として第二次大戦後アジアにおける新興独立国に共通する経済発展問題の一般的性格を研究した。土地改革問題については，それが単なる経済政策の問題ではなく，一種の社会政策であること，したがって特殊の社会条件をその前提として必要とすること，その短期的効果は社会全体としての消費の増大，蓄積の減少であり，したがってそのもとでの投資増大については特殊の措置を必要とすることを明らかにした。また，台湾についての研究では，台湾が大陸からの人口移動，高率の自然増加率，軍事費の負担にもかかわらず，高率の経済成長率を示しているのは，日本時代の外部経済という遺産，アメリカの経済援助，各種の貯蓄強制の措置，選択的重点投資，強力な輸入機構推進政策などによることを明らかにした。原は，アジア後進地域全体に通ずる問題として，その成長率の規制要因を，貿易，国際収支，及び技術上の外国援助，投資などの諸条件について検討し，また，規模の経済実現

のための経済統合，地域統合の問題についても研究を進めた。滝川はフィリッピンを中心として，アジア諸地域の土地改革についてその基礎，機能などの比較研究を行なった。

2　西アジア研究

教授　飯塚浩二・小口偉一，助教授　大野盛雄，助手　板垣雄三，研究委嘱　加賀谷寛

本研究所が研究体制を地域区分に対応させて整備する方針をとり，この方針にしたがった南アジア部門の創設をみてから5年になるが，西アジア部門の設置は，東南アジア部門のそれとともに，いまだ実現されていない。今日の国際政治・国際経済において，東西問題，南北問題の焦点となっているのは，インドネシアから北アフリカにかけてのイスラム諸国である。西アジア研究即ちイスラム研究というわけではないが，本研究班は，イスラム文化の中心地域を対象に，研究所の部門構成の欠を補うべく，その作業を行なっている。

飯塚は，「東洋史と西洋史との間」，「東洋への視角と西洋への視角」，「危機の半世紀」などにおいて，日本人のアジア観を反省し，そのなかでイスラムの世界史的意義と役割について問題提起を行なってきた。さらにアフリカの視察をふまえて，アフリカ研究の意義と課題を明確化するための提言を行なった。

大野は，昭和38～40年の2年間にわたってイランの農村における住み込み調査に従事し，レザイエ（キリスト教徒アッシリア人の村），エスファハーン（イスラム教徒の村），シラーズ（遊牧民族の定着した村）の農村の社会経済構造に関する報告を発表し，またイランの農村をどのように把握するか，その方法について論じた。

板垣は，エジプト民族主義の歴史主義の歴史的展開をあとづける作業として，オラービー運動，ムスリム同胞団，1930年代の「政党政治」に関する研究を発表し，また「アラブ社会主義」の動向と問題点についても検討を試みた。日本におけるアラブ近代史の方法論に関しても若干の試論を提出した。昭和38年2～3月アラブ諸国を訪れたが，40年5月にふたたびアラブ連合におもむき，上記の諸問題の研究を

続行している。

加賀谷はイランを中心に西アジアにおける近代思想運動の解明に努め，小口はバハイズムの諸地域における発展をあとづけるとともに，これが日本における宗教運動に及ぼした影響についての究明を試みている。

3　新旧両大陸における文明起源の比較研究

教授　江上波夫・泉　靖一，助教授　深井晋司，助手　松谷敏雄，研究担当　曽野寿彦・増田昭三・寺田和夫，研究委嘱　増田精一・三宅俊成

本研究班は昭和38年に関野を班主任として結成され，昭和40年に泉を主任として再び設けられた。当班の追求する課題は，新旧両大陸においてそれぞれ独立に文明を発生させた地帯であるアンデスとメソポタミアでの農耕・牧畜の発明から文明の段階にまで発展した過程をできるだけくわしく復元し，それらの過程を比較検討して人類の発展に関する法則性を見出すことにある。

昭和37・38両年に文部省科学研究費の総合研究の分野で交付金を得て，日本ではじめて新旧両大陸にわたる文明起源の比較研究を総合的に行なうことができた。その成果は，昭和38年の２度のシンポジウムにあらわれ，メソポタミアとアンデスにおいて，(1)初期農耕，(2)農耕村落の成立，(3)神殿の成立，(4)階級の成立，(5)王朝の成立の５つの段階を設定して，おのおのの段階にみられる文化の内容を比較し，メソポタミアとアンデスでは食料生産革命から文明発生までの過程がよく似ていることを指摘したのであった。このような基礎的な作業の上に立って，各研究班員は，一方では「アンデス地帯学術調査団」を，一方では「イラク・イラン遺跡調査団」を足場として研究をつづけてきた。

昭和40年においては問題点をしぼり，文明の基礎となった諸文化要素の発現の時点と場所を究明した。とりあげた文化要素とは，石皿石杵，栽培植物，家畜，土器，土偶，鎌，金属器，宗教的建造物等々であって，これらは新旧両大陸で多少のちがいはあるにしても，大部分が共通に文明の必要条件となるものばかりである。

その結果，今まではこれらの文化要素が文明発生の核地帯で発明されて，そこからまわりの地帯に広まったと考えられがちであったが，実はそうではなく，新旧両大陸のどちらの場合でも，いくつかの重要な文化要素は核地帯以外の場所で案外古くから現われていたことが判明した。この事実は，文明につながる諸文化要素が必ずしもその後に文明の発現をみた地帯ではじめておこったのではないことを意味する。このような具体的資料をもとにして，新たに文明起源の問題を追求していかなければならない。

現象としては，文明につながる諸文化要素が文明発生地もしくはその近辺で発明，発見され，それら文化要素が総合されて，次の大きな発展を導いたということがいえるが，なぜある地域に諸文化要素が集積され，他の地域には集積が行なわれなかったかということは今なお残された大きな疑問である。この疑問に答え，人類が文明の段階に発展してきた過程を正しく把握することが本研究班の最も大きな課題である。

4　古代西アジアの民族と文化

教授　江上波夫，助教授　深井晋司，助手　松谷敏雄，研究担当　曽野寿彦，研究委嘱　新　規矩男・堀内清治・池田次郎・増田精一・三宅俊成・杉山二郎

本研究班は文明起源班と東西文化交流班とに分けられる。前者に昭和31年以来発掘してきたイラクのテル・サラサートやイランのマルヴ・ダシュト地方の原始農村遺跡を中心に「文明の起源とその初期の発展の様相」という問題の解明に努力してきた。一方，後者は中国や日本に大きな影響をもたらしたイランの高原の青銅器時代以降の文明，いいかえれば「東亜文明の源流としての古代イラン文明」の解明に努力してきた。

江上は，西アジアの遺跡調査の重要性を指摘し，10年にわたる現地調査の成果を綜括する発表を行なった。その中で，文明起源の研究は人類の歴史のなかで今日最大の関心事であるし，東西文化交流の研究は日本の学者が優位に立ってすすめてい

ける課題であるので，日本としても世界の学界に貢献するために，今後も古代アジアの調査を続行していくべきであると主張した。

〔文明起源班〕 曽野は，タル・イ・ギャブ遺跡で確認された彩文土器の層序にもとづいて，イラン高原先史文化の編年を試みている。イラン高原の先史時代の文化は，彩文土器の面から考えると，北部，中央部，南部でかなり異っており，南部イランのそれは南メソポタミアやシスターンからインダス流域の先史文化に密接な関係のあったことを指摘し，文化の伝播としては南メソポタミアから南イランを通って東方への径路が考えられるとしている。また十分にわかっていないイラン高原先史文化についても研究した。

松谷は，イラクのテル・サラサート遺跡で発見されたいわゆる新石器ハッスーナ期の文化に注目し，当時の文化の復元に努力している。農耕が発明されて定住村落が営まれるようになって間もないこの時期の文化については，十分な資料のあるのはテル・ハッスーナ遺跡とマッターラ遺跡の２ヶ所だけであった。これにテル・サラサートの資料を加え，北メソポタミアを中心にザグロス山脈，アナトリア高原，パレスティナ地方の周辺地域の当時の文化をも考慮に入れ，農耕の発明から定住農耕村落の成立までの過程を追求している。一方，堀内は，建築史学の立場から，西アジアにおける最も重要な建築材である「日乾レンガ」の研究を行ない，日乾レンガの起源に関して新しい説を提出した。

〔東西文化の交流班〕 深井と杉山は，イランのササン朝時代の有名な記念物，ターク・イ・ブスタンの彫刻，浮彫の詳細な研究を行なっている。ここに彫り出されている装飾は正倉院御物にもみられ，装飾の模様が共通している場合がある。これらの具体的な事実を数多く指摘することによって，古代イランと古代日本との間に非常に親密な文化交流のあったことを実証しようとしている。

三宅は，イラン・デーラマン地方出土の三足土器と中国出土のそれとの比較研究を行ない，両者に密接な関係のあることを指摘した。そして，デーラマン地方の三足土器製作の技術は中国より伝わったものであろうと推論している。

世界の古代西アジア研究は日進月歩であり，新しい資料がどんどん追加されていくが，これらの資料を十分に利用し，最もプロバブルな仮説をうち立てることが今後の課題である。

5　インドにおける支配体制と社会構造

助教授　荒　松雄・中根千枝・山崎利男，講師　松井透，
助手　榎本暢子，研究委嘱　中村平治・古賀正則

本研究班は，インド史における重要な問題である支配体制と社会構造の歴史的変遷を中心に研究を進めてきた。山崎は，古代を担当し，主として銅板文書を資料として研究した。またインド国独立後のヒンドゥー法の改革の歴史的意義を検討し，18世紀末から19世紀はじめにかけてのヒンドゥー法の形成の問題をあわせて考察した。荒は，イスラームの影響がインドにあらわれてからのちの，インドの政治と社会の構造の変化を歴史的に解明することを志し，とくに，政治権力と宗教との関連，民衆の改宗の問題，思想史上の諸問題に関して考察した。

松井は，イギリス支配下のインドにおける土地制度の研究を進めるとともに，ムガル帝国の支配体制と土地制度についても考察し，その連続と変化について検討している。同時に，19世紀のイギリス人の政治家のインド観を研究して，外国支配の論理を追及し，英印関係の解明に努めた。榎本は，昭和40年7月以降デリーに留学して，19世紀後半の北インドの土地制度について研究している。

中村は，19・20世紀のインドのブルジョアジーについて研究を進め，会議派政権の中心にあったネルーについても独立前後の政治過程とあわせて考察した。古賀は，経済地理学の方法にたって，インドの土地改革や村落の指導階級の問題，5ヶ年計画における国営部門の問題，さらに国家資本主義の問題などについて研究した。また荒はパキスタンの政治・社会に関して，とくに政治体制とイスラームとの関連についての研究を行なっている。

中根は，インドの社会構造の研究を進めてきたが，昭和37年度に福武直・大内力両氏と共同でグジャラートとベンガルの農村を調査し，その成果を発表した。また

ベンガルの大家族制度の調査をまとめている。

6　デリー諸王朝時代の建造物の研究

教授　山本達郎，助教授　荒　松雄，助手　月輪時房

本研究班は，海外学術調査の項で述べたように，昭和34・36年度に東京大学インド史跡調査団が行なった現地調査の資料をもって行なう研究のために組織されてきた。この研究は，13世紀から16世紀に至るいわゆるデリー・サルタナット時代の建造物のうち，デリー地域に現存するものを中心に行なうものであって，調査団としては，1966年度から，その報告書の第一巻を出版刊行しはじめる予定で準備と研究がつづけられてきている。

山本と月輪とは，トゥグルク朝初期のいわゆるギャース ッディーン＝トゥグルクの墓，およびサルタナット末期に属する四角型と八角型の代表的な２基（シハーブッディーン＝タージ＝ハーンの墓およびいわゆるムハンマド＝シャーの墓）の３建造物を中心に，構造・様式上からする種々の研究を行ない，他のおよそ60に及ぶ墓との対比にもとづく研究を行なった。

これに対して，荒は，文献，碑文を主とする歴史的研究を担当し，奴隷王朝のいくつかの墓，および水利施設のうち，とくに堰堤と水門について研究した。これらの遺跡については，とくに文献上の記述と現存の遺跡とを比較考究して，伝承に対する批判的見解を表明し，とくに水利施設については，その経済的，社会的見地から考察し，またサルタナット権力の支配との関連を重視した。

7　東南アジア研究

教授　橋本秀一・山本達郎，講師　築島謙三，助手　池端雪浦，研究担当　大林太良，研究委嘱　和田久徳・関　寛治

本研究班は昭和39年度に組織された。東南アジアの地域は広汎多様，民族文化は多彩雑多である。現研究班は歴史学，経済学，心理学，文化人類学，政治学などの分野にまたがり，相互の連絡を保ちともかく１つの群を形成している。この広大無辺な学問上の宝庫に切込むには手薄であることはいうまでもない。築島は，39年秋

より約半年の現地調査にもとづき，マレー人の民族意識，マラヤ統治の推移，民族と文化の多様性の由来，村落の自治，いわゆるマレー人の怠情などについての１連の研究を行なった。大林は，インドシナ諸民族の葬制について，とくに先年現地調査したタイ国北部の諸族を中心として報告し，習俗，儀礼，伝説，神話について研究を行なっている。

政治的独立とともに自治的経済的組織を建設する努力が払われているが，貿易や資本関係において旧宗主国への依存関係はいまだ断ち切られていない。経済交流は隣接国との間に稀薄であって，西欧諸国や米国との間に密接である。橋本は各国経済自立のための政府の開発計画に着目し，とくにその遂行実績について検討を重ねつつあるが，36年春40日間セイロンに滞在することができた。また，関は35年春から１年間タイに滞在して，タイの政治事情と国際関係について研究した。

この地域は古くからインド文化，中国文化，ついでイスラーム文化，キリスト教文化を受容し，その文化と社会は多様であり，その解明には歴史的考察がまず重要である。山本は東南アジア史をどのように構成すべきかについて考究する一方，真臘の古代文化について詳しく検討し，またヴェトナムの黎朝時代の家譜と田土丈量文書とを紹介・分析し，その社会経済事情について論じた。和田は華僑の歴史を研究し，スマトラ・ジャワの初期の華僑社会について詳しい論文を発表し，また東南アジアにおけるイスラーム教の受容とその宗教の発展について論じた。池端は1896～1902年のフィリッピン革命について研究し，その背景として前世紀の社会経済構造について分析した。

8　中国における政治機構とその基礎過程

教授　関野　雄，助教授　松本善海・佐伯有一，助手　浜島敦俊，研究担当　周藤吉之・西嶋定生，研究委嘱　堀敏一・小倉芳彦・田中正俊・小山正明・柳田節子・西川正夫・松丸道雄

37・38の両年度は，36年度にひき続き，「中国における政治機構と土地所有の史

的研究」（主任，故仁井田名誉教授）を課題としたが，39年度から「中国古代の政治機構」（主任，関野）と「中国における土地所有の史的研究」（主任，佐伯）の2班に分けた。40年度は，だいたいその継続であったが，後者の「土地所有」を「農村機構」と改め，主任を佐伯から松本に代えた。41年度は，上の両班を統合して，政治機構に重点を置き，その基礎過程の究明に努めている。なお仁井田・中根・石田（旧姓山下）は，37・38の両年度だけ本班の研究に参加した。

本研究班は，設立以来すでに十余年を経過した。中国における最も基礎的な課題を，その全時代にわたって追究することは，きわめて困難な仕事であるが，参加者相互の連絡を密にして，体系的な結論を得るように努力している。本班の報告は，a　先秦～唐，b　五代～宋，c　元～清～民国の2つに大別される。

a　先秦～唐　まず松丸は，甲骨文と金文の分析を通じて，殷周時代の国家機構の解明に努めた。「殷虚卜辞中の田猟地について」は，殷王朝の基盤をなしていた「邑」の分布範囲が，従来の想定よりはるかに狭小であったことを論証したものである。また殷周の王の性格を明らかにするため，「王」字の原義から出発して，殷代の王と諸侯と帝の関係，周代の王と帝と天の関係を考察した。さらに，殷代王室世系に関する従来の研究を回顧したのち，張光直の新見解（クロス・カズン婚の指摘）を紹介批判し，王妣の問題つまり子王と母妣（法定配偶）の関係を通じて，殷代王室の構造に新しい推測を加えた。「殷代王室の世系」は，その成果である。

つぎに関野は，おもに通貨制度の上から，先秦諸国の政治機構を明らかにしようと試みた。その結果，貨幣の鋳造権が国家にあるか，都市に分散しているかという点が，国家権力の強弱を示す指標となりうることをつきとめた。前者に属するのは，刀銭の大部分と円銭の一部，ならびに楚金版と蟻鼻銭であり，後者に属するのは，布銭のほとんど全部である。また，刀銭と布銭の流通圏で発行された2群の円銭は，鋳造権や流通状態に関するかぎり，それぞれ刀銭と布銭の性質を受けついでいることがわかった。さらに，戦国時代における貨幣の普及率からみて，李悝の「尽地力教」の内容に疑問をいだき，また戦国末の混乱期にさいして，貨幣経済が激動する

政局とどのような関連にあったかを究明した。

小倉は，春秋戦国の変革を通じて形成された古代国家の性格を，そのイデオロギー的側面とあわせて考察した。「族刑をめぐる二・三の問題」という論文は，この問題を権力によって執行される刑罰の面から追求し，また「殺人者死，傷人者刑」という刑罰原理についても検討を深めた。戦国・秦漢の政治秩序の独特な性格が中国独自な華夷思想を生み出したが，その形成過程を詳しくたどり，それより以前の，西周・春秋期における戎・狄の実態との関連をも追求した。「孔子から董仲舒へ」においては，現実の政治に対する対決の姿勢をもっていた先秦諸思想が，漢帝国の安定とともに政治に包摂されて，権威主義的性格を帯びてくる過程を考察した。

西嶋は，主として「皇帝」制度の出現とその性格について検討した。その問題点は，秦の天下統一とともに出現する「皇帝」の性格が，それ以前の「王」もしくは「天子」の性格に比して，どのような特徴をもっていたかという点と，皇帝制度出現以後，皇帝は同時に天子とも称せられたが，そのばあい皇帝と天子との間にはどのような機能的差別が存在したかという点にある。前者の点については，「王」もしくは「天子」が爵制的秩序内の身分であったが，「皇帝」は爵制的秩序を超越し，それを規制する絶対的存在であり，それゆえ「皇帝」は上帝すなわち宇宙の根源的支配者と地位を同じくするものであることを明らかにし，後者の点については，「皇帝」は国内的な称号として使用され，その機能する場は国内であったが，「天子」は対外的な称号として使用されるものであったことを示した。

堀は主として北朝から唐に至る均田制を研究した。「北朝の均田法規をめぐる諸問題」は，均田法規の体系を考察することによって，法規解釈上の疑問点をも解決したものであり，「均田法の実施をめぐる問題点」は，戸籍の記載様式と田土還授の関係について新見解を述べたものである。「均田制の成立」は，拓跋族の支配の発展と，中国における豪族社会の性格を考察することによって，均田制・三長制を基礎とする専制国家の個別人身的支配が成立してくる所以を論じたものである。このように成立した均田制下の身分体系，均田制とその崩壊後の小作制，および均田

制崩壊期の政治過程について詳論した。なお本研究班が主催して「均田制をどう見るか」と題する討論をおこなった。

b　五代～宋　唐帝国の崩壊から宋王朝の成立にかけての時期については，わが国においてはとくに変革期としてその性格の究明が行なわれている。この課題について，仁井田は法制史研究と経済史研究を結びつけて，精力的かつ総体的な問題提起をおこない，この変革期を中国における農奴制成立期としてとらえようとした。それは，昭和37年８月に出版された『中国法制史研究』（奴隷法・家族村落法）所収の「中国社会の農奴解放の段階」に集約されている。西川は，この時期における国家権力の機関としての官僚制の変化に関連して，「華北五代王朝の文臣官僚」において，軍事権力化した五代王朝における文臣官僚の位置づけと史的発展とを研究した。仁井田の上記の問題提起をめぐって，現在，この時期を封建制成立期とみないという対立する見解が存在するが，柳田は，佃戸の身分的隷属性の強さつまり土地の緊縛と，土地の零細分散所有とそれに伴なう自由な契約にもとずく地主・佃戸の経済関係が併存する事実を認めた上で，この２つの史実に対して先進後進という地域差概念を導入し，しかも，この両社会の性格を規定する基本的生産関係を追求し，さらに，多数の主戸を戸等制にもとづいて階層的に把握した宋王朝の郷村支配体制全体の中にこれを位置づけ，国家権力との関連においてとらえようとした。また，周藤は，昭和37年に『宋代経済史研究』，40年に『唐宋社会経済史研究』を発表し，前著において，南宋の稲・麦・麻布などの技術や圩田・経界法について研究し，五代の節度使体制が宋代に州県の職役に代わり，王安石の免役・保甲両法の施行によって，郷村の保正長の役と州県の胥吏に分かれたことを明らかにした。後者において，吐魯番の佃人・戸税文書を補正し，宋代の剗佃制・典佃制・田骨・園骨・屋骨，および士大夫の土地制度論，四川の佃戸制，北宋末の公田法を研究した。さらに，宋代の郷村の職役に論及し，耆戸長の法や保正長の法を明らかにし，寛郷・狭郷で負担の相違することと，保伍法，水利機構・詑市の発展に論及している。

c　元～清～民国　元代については，仁井田は，「元明時代の村の規約と小作証

書など」において，小作関係における法慣習を追求した。明代史では，仁井田は，とくに16～7世紀の時期を第一次農奴解放の時期とする説を提起し，「中国社会の農奴とその解放」，「変転期社会における新しい法慣習の生起」，「中国の農奴解放過程と契約意識」などにおいて，宋代以来の佃戸の身分および経済地位の上昇を実証し，さらに，この変化に対応して，地主的支配にも法慣行上の変化が見られることを，「中国社会の同族と族長権威」において明らかにした。これに対して，小山は，主として，明代における国家権力がいかなる方法で農村を掌握し，農民を支配しようとしたかを明らかにするために，賦役制度のとくに戸に対する収奪の形態を詳細に分析し，まず，両税法以来の戸等制にもとづく賦役の徴収方法が，明末から清初にかけて衰え，土地そのものに対する課税法が展開することを明らかにしようとし，さらに，従来，この種の徴役法が主として役に対して施行せられたごとく研究が進められていたのに対して，租粮についても三等九則制が貫徹ししいたことを明らかにした。また，田中は，16・7世紀以降の中国農村社会の階級構造を分析するにあたって，生産力的表象としての「農家家内工業」の展開，土地制度の進展を示すものとしての「一田両主制」，階級矛盾の集中的表現としての「民変・抗租奴変」の3つの指標を考え，農民のもとにおける商品生産の発展が商人資本による新たな価格収奪を可能にし，一田両主制のもとにおける永小作権の成長が商人高利貸資本の寄生の対象となる田面権＝独立の物権化するといった，いわゆる上昇化現象にもかかわらず，階級矛盾が新たに緊張・激化した結果として，抗租・奴変の階級闘争の発展過程を明らかにせんとした。佐伯は，とくに農村工業を含めて，中国の手工業の発達について，15世紀から18世紀にいたる生産構造を系統的に研究した。浜島は，江南の水利灌概の機構を通じて，16～7世紀中国における地主・佃戸関係に対して，国家権力が介入し，新たな再編過程が進行しつつあることを研究しつつあり，また，佐伯は華北農村調査報告を中心資料として，中国の革命前夜の，とくに農村における階級関係について分析を進めつつある。

9　中国の思想と宗教

教授　窪　徳忠，講師　鎌田茂雄，助手　江島恵教，研究委嘱　野田幸三郎・塩入良道・泰本　融

中国に受容された外来宗教のひとつである仏教は，中国固有の思想・宗教と密接な関係・交渉をもちつつ，中国的仏教として新たな展開を示した。一方，道教は仏教の刺戟と影響を受けて，しだいに宗教的な体裁を整えていった。したがって仏道二教の交渉史は中国宗教史のきわめて重要な問題である。本研究班は，仏道二教の文献の基礎的研究をおこない，仏道二教の関係・交渉について日本の宗教との関連をも含めてあらゆる視点から究明することを目的とする。

窪は道教の成立および宋代の新道教たるる全真教の性格を考究するとともに，伝来当初の仏教が中国に定着するためにとった手段について考察した。道教の成立については，「道教々団の成立」，「道教私見」，「道教的宗教集団の出現」などがその成果の一部である。新道教の性格を三教調和の面から考察したのが「金代の新道教と仏教」であり，「宋代の新道教々団」，「長春真人とその西遊」，「純陽宮の壁画にみえる王重陽伝」，「道教の新展開」，「全真教の成立」などは，全真教に関する研究成果である。また元代の仏道論争資料の文献の批判的な基礎研究をふまえて，老子化胡経の再検討をおこない，この書が道教側の創作であるとした従来の説に対して，仏教を中国人により容易に受容させる手段として，仏教側が偽作したものであろうという説を発表した。

鎌田は中国仏教の精華といわれる華厳思想の形成と展開を究明し，『中国華厳思想史の研究』を公刊した。さらに華厳思想の形成を明らかにするためには南北朝時代の仏教々学の研究が必要であって，とくに地論宗の浄影寺慧遠の学説をその社会史的背景を考慮しつつ考究したのが，「浄影寺慧遠における大乗思想の展開」，「浄影寺慧遠の法観念」，「北周廃仏と禅」などである。また華厳教理学を広い視野にたって再検討したのが，「華厳経のめざすもの」，「海印三昧について」，「法界縁起について」などである。一方，仏道両思想の交流について，隋から初唐にかけて成立した道教経典の性格を，「仏教教理の形成におよぼした仏教思想の影響——道教義

枢を中心として——」,「三論元旨について」,「宝蔵論と三論元旨」などにおいて考察した。また仏教の仏性説が道教々理の形成に影響を与えて道性思想が成立したことを明らかにした。

泰本は中観思想の中国的展開を研究し，吉蔵の主著『中観論疏』の原典研究をおこない，その訳註を完成させた。そして吉蔵の中観思想の性格，その中国固有の思想との関係および社会的基盤について考察した。また仏教理学の受容をてがかりとして中国的思惟の特質を検討した。江島助手はインドの中観思想の展開を研究課題として，泰本研究員との共同研究を進めている。

塩入に天台思想の中国的特色を研究し,「天台義における四諦について」,「化法四教における行位の問題」,「入仮と出仮に関する一試論」などの諸論文に成果を発表した。中国仏教の特質を理解するためには，教義や思想だけではなく，宗教儀礼の研究をもおこなわねばならない。そこで伝統的な天台学ではあまり重視されなかった懺法についてその中国的特質を明らかにし，また礼懺と仏名経典について研究した。

中国宗教の特質は，その朝鮮や日本における受容を明確になしければ，十分に把握することができない。窪は，道教の本質を明らかにする目的をもって，庚申信仰をてがかりとして，朝鮮における道教の受容を研究し,「朝鮮の庚申信仰」,「朝鮮の道教」,「李朝の三尸信仰」などの論文を発表した。日本については,『庚申信仰の研究』の続篇たる『庚申信仰の研究——年譜篇——』を刊行し，その資料的研究を大成させた。従来からおこなってきた実態調査はとくに離れ島について継続しており，佐渡，隠岐，対島についての報告をおこなった。また庚申信仰に関する文献についても,「再び老子守庚申求長生経」などにて再検討した。さらに道教と修験道の関係についても考察した。

野田は同じく日本における中国宗教の受容とその展開を明らかにした。まず陰陽道が中国の陰陽五行説と道教との受容からはじまりながらも独自に発展したことを明らかにし，平安時代初期に成立した仏名会が神道的な罪の観念とは異なった懺悔

の儀礼的表現であることを指摘して，その歴史的意義を明らかにした。このほか，仏教儀礼が貴族社会の年中行事として固定化していく過程と，仏教儀礼を含む年中行事の解明を通じて，仏教・神道・陰陽道などを構成要素としている日本の宗教の歴史的展開について研究した。

10　中国絵画の伝統と創造

教授　米沢嘉圃，助教授　鈴木　敬，研究委嘱　川上　涇・戸田禎佑

中国絵画史における伝統性は，例えば南北二宗論や文人画家と職業画家の画風の問題と長く論じられてきたが，それらの論考は十分な様式的検討をへずに行なわれた憾みが多かった。本研究班は昭和38年より同41年に至る間，研究の主題を「中国絵画の伝統と創造」にしぼり，現存遺品の検討を基礎として，作品より帰納される絵画の伝統性を考察し，様式的伝統性と密接する時代的，個人的な様式の創造の問題をもあわせて検討しつづけた。

米沢は「中国美術史における持続と変化」において，中国絵画史の伝統性を，主として〝気韻〟とよぶ造形感情の面でとらえ，それの変容の時期をもって絵画史の時代区分を試み，中国絵画の様式的形成と発展，転換を解明し，様式史としての中国絵画史の方向づけを行なった。ついで「中国絵画の歩み」においては，時代を北宋より清代までに限定し，主題を水墨画，山水画，花鳥画などに分って，伝統様式と，時代，個人様式の創造を論じた。また「文人画」においては，日本の文人画壇が受容した中国文人画とその日本化の問題を提起し，あわせて中国絵画の造形的本質を論じた。

鈴木は，「山水画様式の系譜」において，主として宋元の山水画を扱い，北方様式および南方様式の成立と発展，衰退の問題を，芸術感情や筆墨技法，画面構成などの点から概観したが，「画学を中心とした徽宗画院の改革と院体山水画風の成立」，および「明代画院制について」において，北方系山水画様式の一変容としての南宋院体画風，および明代浙派様式の成立の基盤としての宋代と明代の画院制につき詳

細に考究した。また伝統的逸格水墨画風の最盛期を形成した南宋末の仏教教団内部の問題にふれ，画僧玉潤についての既発表の自説を改正するとともに，定見のなかった画人玉潤の比定に終止符をうった。

川上は，中国絵画研究の現段階におけるもっとも重要な作品の鑑識とその紹介を行なったが，ことに「華嵒の秋声賦意図」および「新羅山人早期の作品」で，清朝乾隆期において個性的創作活動を行なった華嵒（新羅山人）につき家集離垢集を参照しつつ，その閲歴の細緻な研究を行ない，現存および著録の作品群を編年し，揚州八怪との本質的な異同を論じた。

戸田は，「道釈人物画」において，従来行ないえなかった道釈人物画の様式研究を具体的作例にもとづいて行なった。また「湖州竹派」においては，中国文人画家に必須ともいうべき画題である墨竹の本質を，北宋末の文人文同の墨竹の制作態度の中に見出そうとしたが，さらにそのような水墨画の形式と密接不可分な作家と批評家が同居する血縁，地縁グループを細かに考察し，元代以降の文人画風研究の大きな手掛りとした。また「劉節筆藻魚図について」においては，日本に数多く伝存し，宋元画とされている藻魚図について，新たに描写形式検討の必要性を示唆した。

11　中国の思想と文学

助教授　尾上兼英，助手　山之内正彦，研究担当　小野　忍，研究委嘱　竹内　実・新島淳良・野村浩一・丸山　昇・近藤邦康・木山英雄

本研究班は，昭和40年３月まで小野，同年10月まで窪，同年11月以降，尾上が班主任となった。研究班の組織は，思想と文学にわかれる。

文学の分野では旧文学と近・現代文学研究にわかれる。小野の研究は旧文学と現代文学の両面にわたる。前者では明代白話小説の中で最も大きな問題をかかえ，語学的にも難解な「金瓶梅」を翻訳し，また，従来の研究成果をふまえて論考を発表した。後者では「中国現代文学選集」の編集・解説にあたり，民間文芸形成をとり入れた新歌劇についての分野をひらいた。仁井田は中国文学に現われた「義理と人

情」の問題を担当し，近世庶民階級のモラルを解明した。尾上は小説史を担当し，作者・読者層の階層分裂にともなう小説の変質の仮説にそって問題提起をおこない，ひき続き，短編小説と長編小説のテーマ，両者の関連および清代白話小説への展開について研究を進めている。他に「幽明録」の翻訳がある。木山は近世・近代小説の作者の意識と発想に重点をおき，継続研究として水滸伝を扱い，近代文学については魯迅・周作人の思想形成と展開を究明した。山之内は，中晩唐詩の詩史的研究をつづけ，かたわら，明末清初の詩人として王船山を取り上げ，詩人の系譜に特殊な視点を提供した。また，六朝小説の翻訳がある。

近・現代文学の分野では，竹内は，近代日本の中国観，30年代の文学論争，近・現代における民衆の社会意識の展開，最近の文学の動向と文化・思想面の考察などの諸方面にわたりそれぞれ多数の論考を発表した。新島は現代文学の諸問題（文芸講話・何其芳その他），アジア諸地域の教育問題（中国の教育運動・教科書問題・教育史年表その他）・現代思想および時事問題等の諸分野を研究して，それぞれ多くの成果をあげた。丸山は魯迅を中心に文学と革命の問題を追求し，なおひきつづき現代作家と理論形成・文学運動の研究を進めている。

思想の分野では近代思想の形成に中心をおき，野村と近藤があたっている。野村は，清末公羊学派から民族革命思想の形成にいたる研究成果をまとめ，義和団事件前後の政治・思想状況をもあわせて明らかにした。その基礎の上に五四時代の研究を推進している。近藤は「革命派」の章炳麟の思想形成を中心に，清末人士と李大釗ら新知識人階級との継承関係に力点をおき，孫文・李大釗の思想と政治の解明を進めている。

12　中国近現代史の研究

助教授　佐伯有一，助手　石田米子・加藤祐三，研究担当
古島和雄，研究委嘱　野沢　豊

本研究班は，従来，中国史研究の中で最もたちおくれた分野とされる近現代史研究について，とくに，中国の近現代史のもつ世界史的意義とその特質的な発展過程

を研究する目的をもって編成された。佐伯は，従来の研究の反省と今後の出発点を設定すべく，「中国近代経済史の諸問題」，「中国近代史の諸問題」などにおいて，とくに19世紀後半期における問題の所在を明らかにせんとし，さらに中国の労働運動の基礎的研究として，南洋兄弟烟草公司における労働者の状態と労働組合運動を明らかにした。石田は，従来の課題であった辛亥革命について，その「革命」たる所以を農村の戦線と都市の戦線の二系列の結合としてとらえ，その具体的な発展の過程を詳細に明らかにし，「革命」に対する考え方についての当時の先進分子の意識構造の分析に及んだ。また，中国近代史についての従来の研究に対する反省から，新しい近代史研究の課題を明らかにすることにも努力した。野沢は，抗日統一戦線の時期の政治過程を研究し，日・中関係の政治過程を，日中戦争の時期開始と終結時期の二つの激動期において問題にしたほか，中国国内の統一戦線形成の問題として，1920年代の第一次国共合作に際して組織された国民参政会と戦後の政治協商会議への展開をあとづけようとした。古島は，課題の第一として，国民党官僚資本による独占体制の研究を進め，「中国革命と人民民主統一戦線」において，とくに人民民主統一戦線の展開と官僚資本の独占体制との関連を考察し，また官僚資本による支配と農村構造との関連を明らかにするために，「近代中国の農村社会」において，旧中国農村の権力支配と社会結合の問題を究明した。課題の第二として，中国における人民政権の樹立と社会主義への移行の特殊性を明らかにするため，国民経済復興期の再検討を意図し，「国内市場をめぐる国営・私営両経済の斗争」において，国民経済復興期における経済体制の構造的転換の過程を考察し，また，「中国における農民的土地所有の形成とその集団的所有への展開」と「土地改革と農業協同化」において，土地改革および農業協同化による農業改革について考察をおこなった。加藤は，中日戦争終結後から人民共和国成立に至る時期の農村の末端権力構造の変革，ふつう経済構造の変革として把握される土地改革と権力構造の変革を検討し，あわせて中国の土地改革と他の国々のそれとの本質的相違を追求している。

13　現代中国および朝鮮の法と経済

教授　福島正夫，助手　梶村秀樹，研究委嘱　本橋　渥・針生誠吉・常盤絢子・福島　裕

本研究班は，中国ならび朝鮮の政治・法律・経済的な諸機構，およびこれらの諸国の経済・社会状況とその発展について，綜合的に研究することを目的とする。近時，中国がソ連および東欧社会主義諸国と政治上の路線で重大な不一致を生じたことは，社会主義社会の諸問題について従来なされなかった深刻な検討の必要を感じさせ，本研究班はこれについて数回にわたって討論と究明を行なった。また，北朝鮮は社会主義国として独自の発展をなしとげており，中国との対比の上でも貴重な資料を供している。

現代中国研究は，現在の諸問題およびこれに至る過去の発展過程を十分に検討して，目前の現象に追われず，将来の方向を見定めなければならない。この視点から，福島は，政治・法律部門において二方面の仕事をした。一は中国人民民主政権の形成ならびに発展の過程を1920年代以降現在に至るまであとずけた。二は過渡期社会における階級斗争の理論をとくに法の側面から究明した。また針生は，人民公社の政社合一におけるプロレタリアート独裁の問題，および中国法の特色としての過渡期の法理論を論究した。別に中国の法思想と調処制度とについても論文を書いた。

経済部門では，本橋は，アジア社会主義の特質の究明につとめ，中国・朝鮮，ヴェトナムの政治経済の比較研究を試み，また中国国家権力の機能と〈下放〉の意味について論じた。常盤は，中国社会主義経済の特質をその後進国型と中国的展開にみようとした。さらに社会主義経済への移行の問題を国家資本主義の面からとらえた。福島（裕）は人民公社について一連の研究を行ない，また中国経済の現実問題についても研究した。

梶村は，南北朝鮮を歴史的および社会経済的な角度から検討し，とくに北朝鮮の農業協同化の運動とその発展形態に関心をもち研究した。ほかに，朝鮮の近代史についても若干の研究を発表した。

14　中国の国際関係

教授　福島正夫，研究担当　衛藤瀋吉，研究委嘱　坂野正高・関　寛治

本研究班は，19世紀および20世紀の中国をめぐる国際関係における諸様相を政治学的に分析し究明することを目的とする。

植田捷雄名誉教授は，中華人民共和国の国際関係をめぐる諸問題を考察するとともに，日清戦争，シベリア出兵，満州事変などの諸事件における日中関係を論じて，東アジアをめぐる外交史の理解を深めた。

坂野は，中国の国際関係を一層深く理解するために，清朝中期から辛亥革命に至る時期のマカートニーをはじめとする英国人の中国観を検討し，それらの問題関心の推移と中国観の変遷をあとづけた。また同治年間(1862-74年）の条約制定をめぐる清朝官僚の論議を考察した。

衛藤は，1920年代後半の日中関係を研究し，1927年の京奉線遮断問題について報告し，1927—28年の山東出兵問題を検討した。また1924年から28年まで日中緊張に対する日本人の態度について，同時期の新聞を資料として，新しい数量分析の方法を用いて考察した。

関は，現代中国の世界政治における行動体系をとらえるモデルを国際体系論のなかでつくることを研究目標とし，とくにモデルの有効性をシュミレーションのような経験的方法で検証する可能性について模索した。

15　東アジアにおける日本文化の形成

教授　江上波夫・泉　靖一，助手　甘粕　健，研究担当　井上光貞・西嶋定生

江上は「騎馬民族説」の発表以来，日本文化の形成過程について考古学，東洋史学，民族学，人類学，言語学など関連諸科学の成果を綜合し，東アジア史との具体的な関連において解明するという立場から一貫して考察を進めてきた。「日本における民族の形成と国家の起源」はその構想を系統的に述べたものである。弥生文化の形成期を日本民族の形成期に，後期古墳文化の成立期をもって日本古代国家の確

立期とみなし，弥生文化の形成は東南シナ方面の稲作民の南朝鮮，日本への移住が主要な契機となり，これに東北アジア系の金属器文化が加わり，土着の狩猟，漁撈民の社会を融合・同化したものとし，国家の起源に関しては，4・5世紀の交における古墳文化の変質の原因の究明，日・朝，日・中関係の文献資料の新解釈，筑紫神話，出雲神話などの建国説話の再検討の結果，日本の古代国家の形成を，東北アジア系の騎馬民族の支配者集団による南朝鮮，九州，畿内の三段階の移動，征服行動の帰結として構想した。また，縄文時代から古墳時代にいたる，日本列島における造形美術の展開を年代的，地域的両面から概観することによって日本文化形成過程の特質を明かにすることを試みた。

泉は，文化人類学の立場から，日本古代の戸籍つまり郷戸を分析し，日本文化の基礎的構造をなしている家族の組織が，一つの原理によって貫かれていることを明かにした。それは，家長夫婦とその子たち，ならびにその兄弟と姉妹およびその子たちを構成員するものが原型であって，具体的には家族の周期に従って，さまざまの形態をとるにすぎない。これまで，おこなわれてきた郷戸にあらわれた家族の形態の型分類は，じつは家族の周期の過程にあらわれてくるものの分類であって，家族の型を分類しているのではないことを証明した。このような日本古代の家族原理は，周辺の諸民族と比較するならば，ポリネシアの諸部族のそれとよく類似している。しかし，当時におけるポリネシア諸族は，最近の研究によると，今日と同様の分布を示していたとは思われないので，アジア大陸のどこかに居住していたと思われる原ポリネシア諸族と日本民族との言語，社会組織上の諸関係が論ぜられることが望ましいと述べた。

西嶋は6—8世紀の東アジアにおける国際政局の推移を，中国王朝を中心とする冊封体制という国際的秩序の展開として考察し，日本の古代国家の形成もかかる政治関係によって促進され，一定の方向づけがなされたこと，中国の文物制度の波及も冊封体制という場において具体化したことを指摘した。またさらに東アジアの諸国家の形成期にいずれも高塚古墳が出現することに注目し，これらの諸国の君長が，

冊封体制に編入されたことを契機として，彼等に賜与された官爵身分に照応する中国王朝の礼法にしたがって高塚墳墓を造営し，それによって国内的権威を示現したものと考え，従来説明困難であった日本の古墳文化の突発的な発生に関しても，邪馬台国女王の親魏倭王叙任を契機とする冊封体制への編入との関連において理解すべきであるという新たな視点を示した。

甘粕は畿内の大形前方後円墳の形態研究を進めることによって，日本の古墳の造営にあたって，はやくから中国王朝の尺度が用いられていたことを発見し，さらにその推移が冊封体制下における中国王朝と大和政権との政治的関係の推移と無関係でないことを明かにした。西嶋は先に日本の古墳の機能が大和政権の国家構造と秩序理念の特質である姓（かばね）の秩序を顕現し，維持・継承するところにあったという仮説を発表したが，甘粕は，この観点に立って，前方後円墳の東国への伝播のメカニズムを再検討し，畿内において成立した前方後円墳の築造の原理そのものが東国に伝達されていることを明かにし，地方における具体的な古墳の形式の伝播と継承が，特定の中央豪族と地方首長との間の同族関係の設定と，その関係の継続を表示するものではないかという見通しを得た。また古墳造営の尺度の地方への伝播の状況を明かにするため，関東南部において39年以降合計5基の前方後円墳を発掘し，その形態を復原的に考察した結果，それぞれ畿内と同種の尺度の使用を実証することができた。さらに古墳文化の全国的な形成発展の過程から大和政権の固有の政治構造の展開をあとずけることに努めたが，とく江上の指摘した4世紀末以降の古墳文化に現われる征服王朝的な性格を，前期古墳文化の発展の必然の帰結として説明する立場を取った。

16　近代日本の社会と思想

教授　小口偉一・飯塚浩二・川野重任，助教授　大野盛雄，
講師　築島謙三，研究担当　丸山真男・柳川啓一，研究委嘱
花村芳樹・宮川　透・生松敬三・森岡清美・井門冨二夫

本研究班では，各担当者の個別的研究を通して，近代日本の社会・経済・思想・

宗教等の解明が試みられている。それらはいまだ総合的な研究にまではいたっていないけれども，「近代日本」の性格を明らかにするための基礎的な操作といえる。とくに飯塚は，「東洋への視角と西洋への視角」をとりあげて，研究の方法ばかりでなく，研究者の研究態度そのものを問題とし，今後のアジア研究の方向を示唆した。これは，日本人学者による「アジアにおける日本」の究明の要請するものであるとともに，また地域研究の重要性を問いただす意味をもっている。川野・大野・花村による経済構造の分析は，それぞれ地域開発・地域経済の問題の究明をなすものであり，一方，精神構造についても，小口・柳川・森岡・井門は，地域社会と宗教との関連をとりあげた。小口の新宗旨と地域社会の関係の調査研究，柳川の地方都市における神社祭祀（いわゆる祭礼）の機能の調査研究，森岡の近郊化による地域構造の変化の研究，井門の都市社会における宗旨の研究等は，戦後における宗旨の構造変化の探究という点で共同研究の成果をあげつつある。

思想史的には，丸山による正統と異端の問題の提起，宮川・生松の共同研究による日本文化論の分析等は，思想史の方法論的な検討を行なっているものといえる。また築島は，外国人の日本観の研究をつづけると同時に，言語心理学を「ことばの社会心理」として発展させ，基礎科学の問題に寄与した。

B 研 究 業 績

昭和36年10月以降，専任および併任教官の研究業績を記す。退職した者については在職期間中のものに限って記す。（＊は著書，＊＊は訳書）

飯 塚 浩 二

＊東洋史と西洋史とのあいだ	岩波書店	38—4
＊経済地理テキスト版	大修館	39—10
＊東洋への視角と西洋への視角	岩波書店	39—11
＊危機の半世紀	文芸春秋社	40—12
＊地理学と歴史	古今書院	41—6

アフリカとアラビア語	サウディアラビア	4	36—11
アフリカ観への素材	思想		37—1
アフリカの素顔	中央公論		37—1
アラブのシチリア ——オリエント＝地中海世界史の縮図——	思想		37—7
ノルマンのシチリア	思想		37—12
アラビアン・ナイト再発見 ——異彩の民話・民話の異端——	文芸春秋		37—12
「鉄砲」文明論	文芸春秋		38—6
白禍と黄禍 ——日露戦争中のA・フランスと第二次大戦後のG・ジュアメル——	世界		38—8
アジアの視角とヨーロッパへの視角 ——一つの覚え書——	思想		38—8
戦争末年の南満州における経済事情と労務管理——密輸，行政供出と攤派，把頭制度，その他——	東洋文化研究所紀要	32	39—3
An Approach to Asian Studies from the Standpoint of Human Geography	The Developing Economies	2—3	39—9
Les "Mille et une nuits" en tant que source hitorique	Annurio (Istituto Giapponese di Cultura in Roma)	2	39
戦争末期の蒙疆 ——中国の秘密結社，その他——	東洋文化研究所紀要	35	40—3
ヨーロッパ・対・非ヨーロッパ（1～4）	思想		40—3, 5, 6, 7
〝洋学研修〟と大航海時代の実録	図書		40—4
戦争末期における熱河および興安地区 ——満蒙旅行のリポート第4部——	東洋文化研究所紀要	38	40—10
北満における白系露人の入植地ロマノフカについての所見	東洋文化研究所紀要	40	41—3
大航海時代	ソビエト科学アカデミー版「世界史」月報	31	41—
太平洋の政治地理（1～3）	地理		41—9, 10, 11
戦争末期における北満	東洋文化研究所紀要	42	41—11

江上波夫

＊北アジア・中央アジア（共編） 「図説世界文化史大系」	角川書店	13	36—2
＊マルヴ・ダシュトⅠ ——タル・イ・バクーン——（編者） （東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書Ⅱ）	東洋文化研究所		37—3
＊マルヴ・ダシュトⅡ ——タル・イ・ギャプ——（編者） （東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書Ⅲ）	東洋文化研究所		37—3
＊西アジアⅡ（編著）	「世界考古学大系」 （平凡社）	11	37—7
＊オリエント（編者）	「世界美術全集」 （角川書店）	20	38—1
＊ファハリアンⅠ ——タペ・スルヴァンの発掘——（編著） （東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書Ⅳ）	東洋文化研究所		38—3
＊西アジアの人類学的研究（共著） （東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書Ⅴ）	東洋文化研究所		38—11
＊西洋（1）先史	「世界美術全集」 （角川書店）	25	39—5
＊日本国家の起源（討論会記録）	東北大学日本文化研究所		39—6
＊古代社会（編著）	「現代のエスプリ」 （至文堂）	3—12	40—3
＊アジア文化史研究	東洋文化研究所		40—3
＊西南アジア（編著）	「世界文化シリーズ」 （世界文化社）	22	40—5
＊日本美術の誕生	「日本の美術」 （平凡社）	2	41—1
＊西アジア（編著）	「世界の文化」 （河出書房）	2	41—4
＊西南アジア（編著）	「世界の文化地理」 （講談社）	3	41—9
北方ユーラシアにおける頭皮剝奪の風習 ——スキタイの起源の問題に寄せて——	東洋文化研究所紀要	28	37—3
文明論の試み——言語について——	世界	195	37—3
文明論の試み——文化財について——	世界	196	37—4
遊牧文化の発展	「世界考古学大系」 （平凡社）	9	37—4
動物意匠の問題	「世界考古学大系」 （平凡社）	9	37—4

文明論の試み——人種・民族について——	世　界	197	37—5
文明論の試み——平和について——	世　界	198	37—6
文明論の試み——「都市」について——	世　界	203	37—11
都市生活	「世界考古学大系」(平凡社)	16	37—12
勝坂式土器の動物意匠について	国　華	855	38—6
古代エジプトの風土	世　界	210	38—6
スウェーデン出土の小仏像	Museum	149	38—8
日本における民族の形成と国家の起源	東洋文化研究所紀要	32	39—3
騎馬民族日本征服説	「日本国家の起源」(至文堂)		39—3
The Formation of the Race and the Origin of the State in Japan	Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko	23	39—3
スキタイ美術への案内	世　界	222	39—6
「第2の自然」と人類	日　本	3	40—3
華陀と幻人	石田博士褒寿記念「東洋史論叢」		40—8
メソポタミヤ北部の初期農耕村落文化に関する一考察——第四次イラク・イラン遺跡調査団の発掘(1964年)を中心として——(共著)	東洋文化研究所紀要	38	40—10
いわゆるパルティア・ササン朝の古墳墓について——第四次イラク・イラン遺跡調査団の発掘(1964年)を中心として——(共著)	東洋文化研究所紀要	39	40—12
内陸アジア(共著)	日本民族学協会編「日本民族学の回顧と展望」		41—3
人類が自由になる日	文芸春秋		41—8
On the Granary excavated at Teluleth Thalathat in 1965-66	VIIe Congrès International des Sciences Prèhistoriques et Protohistoriques, Prague		41—9

米沢嘉圃

＊中国美術　I(編著)	講談社		39—12
＊文人画(吉沢忠氏と共著)	「日本の美術」(平凡社)	23	41—4

歴代名画記撰述の動機	「中国の名著」(勁草書房)		36—10
中国博物館の明清画	Museum	150	38—9
中国美術史における持続と変化	「世界美術史大系」(講談社)	1	38—12
中国における文化財保護の現状	文化財	4	39—1
明清画の展望	「明清の絵画」(便利堂)		39—3
林良筆鵜図	国華	865	39—4
禹之鼎筆楽春園図巻	国華	870	39—9
中国絵画の進み	「世界美術史大系」(講談社)	10	40—5
中国美術の旅	東亜時論		41—9

福島正夫

＊「家」制度の研究　資料編二（編著）	東京大学出版会		37—3
＊地租改正の研究	有斐閣		37—9
＊穂積・末弘両先生とセツルメント（川島氏と共編）	東京大学セツルメント法律相談部		38—4
＊社会主義国家の裁判制度（編著）	東京大学出版会		40—2
＊中国の人民民主政権	東京大学出版会		40—9
＊明治二十六年全国山林原野入会慣行調査資料——山梨県——（編著）	森林所有権研究会		40
＊中華ソビエト共和国・中国解放区婚姻法資料	社会主義法研究会・中国農村慣行研究会		40—9
＊林野入会権の本質と様相（潮見・渡辺氏と共編著）	東京大学出版会		41—3
＊中国の法と政治	日本評論社		41—6
人民民主統一戦線と人民民主独裁	東洋文化研究所紀要		36—11
立法過程の研究——ソ連——	比較法研究	23	37—3
人民公社をめぐる法的諸問題——あわせて中国法の特色をみる——	東洋文化	32	37—3
「両参一改三結合」について——中国労働法の新たな発展動向——	野村平爾先生還暦記念論文集		37—6
ソ連民法における権利濫用	末川先生古稀記念論文集「権利の濫用研究」下		37—9

ソ連農業企業とその問題	東洋文化研究所紀要	30	38—3
中国法の特色	アジア経済旬報	553	38—10
Zaibatsu and the Japanese Family System seen through their "Family Constitution"	Trudy 25vo Mezhdu Narodnovo Kongessa Vostokovedov, 1960, Moskva		38—
社会主義社会における家族法	現代婦人問題研究会報告	1	39—10
技術資料の宝庫としての府県庁所蔵文書の取扱について	都道府県展望	76	40—1
中国の裁判制度——民事訴訟——	「社会主義国家の裁判制度」		40—3
中ソ論争と過渡期国家の理論——とくに過渡期のプロレタリアート独裁について——	アジア経済旬報	617	40—7
中ソ論争と法の理論	法律時報	37—11	40—11
イスラーム家族からソビエト家族へ——ソ連領中央アジアにおける婦人解放と婚姻＝家族法の変革——	青山道夫教授還暦記念「法と家族」		40—9
社会主義社会における矛盾と法——中国法理論の新動向——	東洋文化研究所紀要	40	41—3
天海謙三郎著「中国土地文書の研究」解題（小沼正氏と共作）			41—3
人民公社生産隊と財務会計制度	中国研究所月報	219	41—5
仁井田博士の人と学問	図書	1966—8	41—8
仁井田博士の中国研究	法律時報	38—9	41—9
民法起草家の予見と明治百年の法律（上，下）	法律時報	38—10, 11	41—10, 11

川野重任

＊農業問題（編著）	春秋社		38—5
＊協同組合事典（編著）	家の光協会		41—2
**ヘディ「現代農業経済学」	春秋社		37—12
Socio-economic Significance of Land Reform in Southeast Asian Countries	The Developing Economies	1	37—8
Plurality of the Employment Structure in Japanese Agriculture	The Rural Economic Problems		38—4

シュルツの理論	現代経済理論のエッセンス（ペリカン社）		38—9
アジアの経済発展の体制——台湾の事例研究——	「社会科学」（経済往来社）		40—2
地域開発と農業問題	「日本の地域開発」（東洋経済新報社）		40—6
Economic Signification of the Land Reform in Japan	The Developing Economies	3—2	40—7
Conflicts between Local Interests and National Plans in Relation to Agricultural Development	Proceedings of the Twelfth International Congress of Agricultural Economists		41—4
「東南アジア開発」の特質と問題点	国際問題	73	41—4

小口偉一

＊宗教社会学序論	国学院大学		36—12
＊宗教（編著）	至文堂		39—7
神道とシャマニズム	研修（国学院大学）	13	37—9
地域社会と宗教	宗教研究	177	39—1
現代日本における宗教と政治	東洋文化	39	39—3
Religion and Politics in Contemporary Japan	Papers Presented at the 1964 Peking Symposium		40—3
千家尊福と国家神道問題	中央公論		40—4

橋本秀一

＊アジア特産物の国際需給	アジア経済研究所		36—2
＊セイロンの経済開発（共著）	アジア経済研究所		37—11
古代セイロンの灌漑事業	アジア経済	3—8	37—8
アソカ碑文の旅	東洋文化	35	38—3
セイロン北部・東部乾燥地方	「世界地理風俗大系」（誠文堂新光社）	9	38—12

窪徳忠

＊庚申信仰の研究—年譜篇—	東洋文化研究所		37—12
＊道教百話	筑摩書房		39—10

庚申信仰と「七」—その道教的淵源について—(上)(下)	社会と伝承	5—3, 4	36—10, 12
江戸時代の庚申待	庚申	26	37—2
庚申塔造立を物語る資料(上)(下)	練馬郷土史研研究	40, 41	37—5, 7
再び老子守庚申求長生経について	東方学会創立十五周年記念東方学論集		37—7
道教と修験道	宗教研究	173	37—12
長春真人とその西遊	東洋文化研究所紀要	29	38—1
庚申信仰と東方朔	庚申	30	38—1
佐渡に残る庚申資料	庚申	31	38—3
金代の新道教と仏教——三教調和思想からみた——	東方学	25	38—3
佐渡に伝わる庚申の説話	庚申	32	38—5
三尸駆除法と中国仏教	岩井博士古稀記念典籍論集		38—6
猿田彦神社と庚申信仰——「庚申御本縁」について——	庚申	34	38—11
中国の竜の話	日本歴史	188	39—1
朝鮮の庚申信仰	庚申	35	39—1
隠岐に伝わる庚申の説話	〃	36	39—3
元代仏道論争研究序説	結城教授頌寿記念仏教思想史論集		39—3
慈覚大師のみた会昌の廃仏——地方への徹底について——	慈覚大師研究(天台学報6)		39—4
隠岐の庚申信仰概観	隠岐郷土研究	9	39—5
庚申待と月待	石田英一郎教授還暦記念論文集		39—7
宋代の新道教教団——全真教を中心に——	歴史教育	12—8	39—8
純陽宮の壁画にみえる王重陽伝	鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢		39—10
高野山内の庚申信仰	密教文化(大山教授頌寿記念論文集 上)	69・70	39—11
対島の庚申信仰	庚申	38	39—12
朝鮮の道教	東方学	29	40—2
道教私見	海外事情	13—6	40—6
道教的宗教集団の出現	世界史の研究	44	40—7
老子化胡説の成立に関する一臆説	石田博士頌寿記念東洋史論叢		40—8
道教教団の成立	世界史の研究	45	40—10

庚申信仰研究の回顧と展望	庚　　申	41	40—11
道教の新展開	世界史の研究	46	41—2
李朝の三尸信仰	朝鮮学報	37・38	41—1
道教と近代中国	世界史の研究	47	41—4

関野　雄

＊日本考古学辞典（共編）	東京堂		37—12
＊中国考古学研究（再版）	東京大学出版会		38—8
＊世界美術　18 中国　I（先史—唐）	講談社		41—2
中国の考古学——日本古文化との関連性——	日本歴史	161	36—11
先秦貨幣雑考	東洋文化研究所紀要	27	37—3
楽浪と洛陽	「世界美術全集」月報 （角川書店）	15	37—5
黄河文明はどのように発展したか	歴史教育研究	24	37—7
土の芸術	「世界美術全集」 （角川書店）	12	37—11
考古学史・東アジア	「世界考古学大系」 （平凡社）	16	37—12
東亜考古学	「日本考古学年報」 （誠文堂新光社）	10	38—3
十年来中国考古学関係文献提要	岩井博士古稀記念 典籍論集		38—6
中国の古代貨幣	「古代史講座」 （学生社）	9	38—11
安陽紀行——殷の都の廃墟を探る——	海外事情	11	38—11
先史と殷周の美術	「世界美術大系」8 （中国美術 I）（講談社）		38—12
貨幣からみた中国古代の生活	風俗	4—3	39—11
刀銭考	東洋文化研究所紀要	35	40—3
考古学界の展望	「研究論文集」 （文科系学会連合）	15	40—3
Prehistory, Yin and Chou	Japan at the XIth International Congress of Historical Sciences in Vienna		40—7
釿字考	石田博士頌寿記念東洋史論叢		40—8

刀銭考補正	東洋文化研究所紀要	40	41—3
右卯等文字刻石他	「西安碑林」（講談社）		41—8
中国の文化財保護	月刊文化財	9	41—9

泉　靖一

＊インカの祖先たち	文芸春秋新社		37—4
＊Excavations at Kotosh, Perú（共著）	角川書店		38—11
＊アンデスの芸術	中共公論美術出版		39—5
＊プレ・インカ服装図録	三一書房		39—7
＊プレ・インカ秘宝図録	三一書房		39—9
＊文明をもった生物（ＮＨＫ現代科学講座１）	日本放送出版協会		41—1
＊Excavations at Pechiche and Tumbes Valley, Perú.（共著）	角川書店		41—2
＊済州島	東洋文化研究所		41—3
東西二つの文化圏——日本文化の地域性——	中部日本新聞		37—5
肌の白い革命家たち	東京大学新聞	211	37—5
アンデスの東斜面における形成期文化の研究民——コトシュの発掘を中心として——（共著）	民族学研究	26—4	37—9
民族誌学よりみた家族と村落	古代史講座	6	37—10
アンデスの焼きもの	学鑑	59—12	37—12
朝鮮の現実に目をふさぐな	世界	204	37—12
文化の等質性と異質性	思想	463	38—1
日本人の人種的偏見	世界	207	38—3
アンデスの沖縄県人	図書	164	38—4
アンデスの古文明にいどむ	中部日本新聞		38—12
中央アンデスの形成期における建造物についての一考察——コトシュの遺構について——（共著）	石田英一郎教授還暦記念論文集		39—7
国際人類学・民族学会	朝日新聞		39—8
南アメリカ美術（編著）「世界美術大系」	講談社	23	39—8
オレオピテックスの再検討——人類の起源の問題をめぐって——	図書	181	39—9

ユーラシヤ大陸のまんなか ——中央アジアと西アジアの旅——	図書	183	39—9
文化の人類的側面の展開	思想	488	40—2
中南米文化の特質	研修	50	40—4
コカの魔力	からだの科学	3	40—5
アメリカ大陸の古代文化	「世界の文化」(河出書房)	11	40—6
石田英一郎論	思想の科学	76	40—7
火山灰地——遠い背景・近い背景——	久保栄研究	8	40—11
書きかえられる文明史	朝日新聞		40—11
人類と文化の進化 ——採集狩猟時代を中心として——	教育	189	40—11
韓国の「国学」	図書	500	41—2
文明の起源	思想	501	41—3
都市と文明とヒト	Space Design	16	41—4
アメリカ大陸における文化の発生	「大航海時代叢書」(岩波書店)	4	41—7

山本達郎

デリー諸王朝の遺蹟	東方学	21	36—10
宋会要交趾伝訳註稿(1) (和田久徳氏と共著)	南方史研究	3	38—8
嘉隆二年の田土丈量文書	岩井博士古稀記念典籍論集		38—6
歴史はいかにして書かれるか ——変革期の歴史叙述について——	中央公論		40—3
敦煌発見オルデンブルク将来田制関係文書五種——	石田博士頌寿記念東洋史論叢		40—8

石田英一郎

*人類学(泉靖一・曽野寿彦・寺田和夫共著)	東京大学出版会		36—11
A Culture of Love and Hate	Japan Quartely	8—4	36—10, 12
形成期の農耕文化	古代史講座(学生社)	2	37—2
人類学上から見た人間の疎外	論争		37—3
Nature of the Problem of Japanese Cultural Origins	Japanese Culture : Its Development and Characteristics (Chicago)		37

結城令聞

初唐仏教の矛盾と国家権力との交錯	東洋文化研究所紀要	25	36—11
人間と宗教	青淵		37—2
The Meaning Jōdo	The Hōen(法苑)(Honpa Honganji Mission of Hawaii)	5	37—4
中国仏教に於ける人生観	理想	348	37—5
ヒューマニズムと親鸞思想	在家仏教	37—9	37—9

仁井田陞

＊中国法制史研究〔奴隷農奴法・家族村落法〕	東洋文化研究所		37—7
＊中国法制史研究〔法と慣習・法と道徳〕	東洋文化研究所		39—3
浮生六記	東京大学中国文学研究室編「中国の名著」		36—10
中国社会の同族と族長権威——とくに明代以後の族長罷免制度——	東洋文化研究所紀要	25	36—11
中国社会の農奴解放の段階	中国法制史研究		37—3
チベット社会の農奴解放	中国法制史研究		37—3
明清時代の族譜における家産関係文書と小作関係文書	中国法制史研究		37—3
元明時代の村の規約と小作証書など——新たに調査した日用百科全書の類二十余種によつて——	中国法制史研究		37—3
清代湖南のギルドマーチャント——洪江の十館首士の場合——	東洋史研究	21—3	37—12
東アジア諸国の固有法と継受法	思想	463	38—1
吐魯番発見の高昌国および唐代租田文書	東洋文化研究所紀要	29	38—1
敦煌資料第一輯について——そのもつ意味——	大安	6—4	38—4
チベット社会の農奴解放とその後	中国現代文学選集月報	16	38—5
敦煌唐律ことに捕亡律断簡	岩井博士古稀記念典籍論叢		38—6
中国社会の農奴とその解放	歴史教育	11—9	38—9
新編事文類要啓劄青銭解題			38—10
内藤乾吉著「中国法制史考証」	史学雑誌	72—11	38—11
高麗の親等制度と中国法	中国法制史研究		39—3

高麗および李氏朝鮮の財産相続法と中国法	中国法制史研究		39—3
再び唐律疏議の現存最古版について	中国法制史研究		39—3
敦煌発見則天時代の律断簡	中国法制史研究		39—3
永楽大典本「慶元条法事類」について	中国法制史研究		39—3
国家の法的規律と法慣習	中国法制史研究		39—3
変転期社会における新しい法慣習の生起	中国法制史研究		39—3
永楽大典本「清明集」について	中国法制史研究		39—3
旧中国社会の義理と人情 ——浮生六記を主題として——	中国法制史研究		39—3
中国の農奴解放過程と契約意識 ——地主の支配権力をめぐって——	中国法制史研究		39—3
元明時代の村の規約と小作証書など ——とくに元泰定刊「新編事文類要啓劄青銭」について——	中国法制史研究		39—3

植田捷雄

中華人民共和国の外交	「中国政治経済綜覧」		37—1 39—1
中華人民共和国の国際関係史概説	「中国政治経済綜覧」		37—1 39—1
香港と澳門	〃		〃
中共の領土権に関する主張	読書資料		37—2
シベリア出兵と北樺太問題	国際法外交雑誌	60—4・5・6	37—3
中国をめぐる最近の国際情勢 ——特に日中関係を中心として——	民主主義研究会		37—4
中共の国際的地位	大陸問題	125, 126	37—6, 7
中共の国連加盟問題	アジア経済	3—9	37—9
日清戦役と国際法	英修道博士還暦記念論文集「外交史及び国際政治の諸問題」		37—11
「二つの中国」と日本	「ソ連と中共」下巻		37—11
日中関係の推移の展望	社会科学	1	38—11
満州事変をめぐる日本の外交	東洋文化研究所紀要	33	39—3
ヨーロッパにおける東洋研究	外務省国際資料部調査課		39—4
欧州各国における東洋（中共）研究 ——特に英国及びイタリアに関するもの——	外交春秋		39—9

日中相互理解のために ——「一つの中国」か「二つの中国」か——	自由		39—12

丸山真男

＊日本の思想	岩波書店		36—11
＊Thought & Behavior in Modern Japanese Politics	Oxford University Press		38
思想史の考え方について——類型・範囲・対象	武田清子編「思想史の方法と対象」(創文社)		36—11
近代日本における思想史的方法の形成	南原繁先生古稀記念論文集「政治思想における西欧と日本」		36—11

小野　忍

＊中国現代文学選集　第16巻　記録文学集Ⅱ	平凡社		38—2
＊中国現代文学選集　第8巻　抗戦期文学集Ⅱ	平凡社		38—6
Chin P'ing Mei: A Critical Study	Acta Asiatica	5	38—

松本善海

吐魯番文書より見たる唐代の隣保制	西域文化研究	6	38—3

荒松雄

＊インド・パキスタン・セイロン（岩塚守公・山崎利男両氏と共編）	講談社		39—5
ムスリム支配体制とインド社会	「世界の歴史」(筑摩書房)	13	36—11
アジアの認識とアジアの研究	世界	36—12	36—11
日本人のインド認識について	海外事情	12—2	39—2
デリーに現存する奴隷王朝初期の墓について	東洋文化研究所紀要	33	39—3
デリーに現存する奴隷王朝中期の墓について	東洋文化研究所紀要	34	39—3
P・ハーディー著インドにおける中世の歴史家	東洋学報	47—2	39—12
デリーに現存する奴隷王朝の末期の墓について	東洋文化研究所紀要	35	40—2

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤と水門の遺蹟について	東洋文化研究所紀要	36	40—3
印パ軍事紛争における宗教対立の根源	朝日ジャーナル	7—40	40—9
カシミール問題と印パ対立	世界	40—11	40—10
回教——宗教と政治・社会——	朝日ジャーナル	8—34	41—8

佐伯有一

中国における手工業の発達	「世界の歴史」(筑摩書房)	11	36—10
中国の労働者についての研究ノート	東洋文化	32	37—3
明末織工暴動史料類輯	清水博士追悼記念明代史論叢		37—6
中国近代経済史研究の諸問題	社会経済史学	31—1～5	41—1
中国近代史研究の諸問題	歴史学研究	311	41—4
中国近代史研究の諸問題	歴史学研究	316	41—9

中根千秋

＊インド村落の社会経済構造(福武直・大内力両氏と共著)	アジア経済研究所		39—3
＊The Socio-Economic Structure of the Indian Village——Survey of Villages in Gujarat and West Bengal——(福武直・大内力両氏と共著)	アジア経済研究所		39
日本同族構造の分析——社会人類学的考察——	東洋文化研究所紀要	28	37—3
The Nayar Family in a Disintegrating Matrilineal System	International Journal of Comparative Sociology	3—1	37—5
南西諸島の社会組織・序論	民族学研究	27—1	37—12
母系制の構造分析	岡正雄教授還暦記念論文集「民族学ノート」(平凡社)		38—9
台湾ヤミ族の社会組織について——衛惠林・劉斌雄の調査報告を中心として(共著)	民族学研究	27—4	38—11
日本的社会構造の発見——単一社会の理論——	中央公論	39—5	39—4
Characteristics of Japanese Intellectuals	Journal of Social and Political Ideas in Japan	2—1	39
「ヒキ」の分析——奄美双系社会の血縁組織	東洋文化研究所紀要	33	39—3
「家」の構造分析	石田英一郎教授還暦記念論文集(角川書店)		39—7

〔座談会〕中根千枝「日本的社会構造の発見——単一社会の理論——」をめぐって	東洋文化	39	40—3
Towards a Theory of Japanese Social Structure	The Economic Weekly	17	40—2
A Plural Society in Sikhim — A Study of the Interrelations of Lepchas, Bhotias and Nepalis	C. von Fürer-Haimendorf: Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon(APH.Bombay)		41
日本の社会構造についての一考察	「高度産業社会と経営者」(鹿島出版)		41
Sociology and Social Anthropology in Complex Society: Some Examples from Japan	Official Paper of the 6 th Congress of Sociology, Evian		41

深井晋司

沖ノ島出土瑠璃碗断片考	東洋文化研究所紀要	27	37—3
ギラーン州出土銀製八曲長坏に関する一考察	国華	842	37—5
ギラーン州出土切子装飾瑠璃壺に関する試論	東洋文化研究所紀要	29	38—2
アナーヒター女神装飾銀製八曲長坏に関する一考察	国華	859	38—10
ハッサニ・マハレ遺跡出土突起装飾瑠璃碗に関する一考察	東洋文化研究所紀要	36	40—3
アナーヒター女神装飾の銀製把手付水瓶に関する一考察	国華	878	40—5
いわゆるパルティア・ササン期の古墳墓について(江上波夫・曽野寿彦・池田次郎の諸氏と共同執筆)	東洋文化研究所紀要	39	40—12
デーラマン地方出土帝王狩猟図銀製皿に関する一研究	国華	892	41—7

山崎利男

*インド・パキスタン・セイロン(荒松雄・岩塚守公両氏と共編)	講談社		39—5
チャールキヤ期の寺院	『世界の歴史』(筑摩書房)	13	36—11
カースト制度の歴史的研究のために	歴史学研究	262	37—2
メイヤー「中央インドのカーストと親族」を読んで(1)	東洋文化	33	38—3